

シンポジウム

私たちの住んでいる 地域(空間)をデザインする

～空間に刻まれた歴史・暮らし・文化を語る～

成果報告書

脊振山頂から佐賀平野、有明海の眺め

平成 21 年 3 月

NPO 法人クリエイト九州

シンポジウム

私たちの住んでいる地域(空間)をデザインする

～空間に刻まれた歴史・暮らし・文化を語る～

日時/平成 21 年 1 月 10 日土曜日 13:30～17:00

場所/佐賀県立美術館ホール

入場者/約 300 人

主催/NPO 法人クリエイト九州

後援/佐賀県・佐賀市・佐賀新聞社・STS サガテレビ・NHK 佐賀放送局・NBC ラジオ佐賀
西日本新聞社・読売新聞佐賀支局・朝日新聞社・毎日新聞社

目次

1. 出演者略歴

P1

2. 基調報告

P3

川上義幸理事長P3

3. 基調講演

P5

矢田俊文氏P5

4. パネルディスカッション

P23

桑子敏雄氏P23

村岡央麻氏P29

合田博子氏P32

多良正裕氏P38

荒牧軍治氏P44

意見交換、総括、会場の感想、閉幕挨拶P49



基調報告

川上 義幸（かわかみよしゆき、NPO 法人クリエイト九州理事長）

〔略歴〕

九州大学大学院工学研究科修了後、建設省（現・国土交通省）に入省。佐賀県副知事他。2008 年 4 月佐賀大学監事に就任。

基調講演

「魅力溢れる北部九州の歴史・文化(空間力)を地域の発展にどうつなげるか～これからの国土計画と国土形成～」

矢田 俊文 氏（やたとしふみ、北九州市立大学学長）

〔略歴〕

1971 年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了・理学博士

1982 年 九州大学経済学部教授

1997 年 九州大学副学長

2002 年 九州大学大学院経済学研究院長

2005 年 北九州市立大学学長に就任

国土審議会委員としても活躍。現在は、九州圏広域地方計画協議会 学識者懇談会委員長、九州地域戦略会議 道州制検討委員会委員長、内閣府道州制ビジョン懇談会 区割り基本方針検討専門委員会委員長、公立大学協会副会長、北九州市基本構想審議会会長を務める。産業経済、経済地理学専攻。

主な著書、『21 世紀の国土構造と国土政策』（大明堂 2000 年）、『現代経済地理学』（共編著）（ミネルヴァ書房 2000 年）、『地域構造論の軌跡と展望』（編著）（ミネルヴァ書房 2005 年）

パネルディスカッション

「空間に刻まれた歴史・暮らし・文化を語る」

コーディネーター

桑子 敏雄 氏（くわことしお、東京工業大学大学院社会理工学研究科教授）

〔略歴〕

1980 年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了

1996 年 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授

環境・生命・情報などの問題にかかわる価値の対立・紛争を分析し、合意形成プロセスの理論的基礎を明らかにするための研究を行っている。理論面とともに、実践的に応用するための手法を開発すること、さらに、この課題を実現するために、日本・東洋・西洋の思想を問題解決のための知的資源として活用することも課題としている。また、ダム問題や地域づくりの合意形成プロセスの設計、運営、進行の実践経験も積んでいる。学位 博士（文学）（1993 年、東京大学）

主な著書、『風景のなかの環境哲学』（東京大学出版会 2005 年）、編著『日本文化の空間学』（東信堂 2008 年）など。

パネリスト（五十音順）

荒牧 軍治 氏（あらまきぐんじ、佐賀大学理工学部都市工学科教授）

〔略歴〕

1968 年 九州大学大学院工学研究科土木工学専攻工学修士

1997 年 佐賀大学理工学部都市工学科教授

佐賀大学副学長、佐賀大学低平地研究センター長、有明海総合研究プロジェクト長等を歴任。工学博士。

2007 年 6 月環境大臣表彰を受賞

現在、有明海・八代海総合調査評価委員会委員委員長代行、九州圏広域地方計画協議会学識者懇談会委員、佐賀市都市計画審議会会長、NPO 法人有明海ぐるりんネット代表理事等を務める。

合田 博子 氏（ごうだひろこ、兵庫県立大学環境人間学部教授）

〔略歴〕

父方ルーツは熊本県玉名郡。社会人類学博士（東京都立大学）、文化人類学・民俗学者。

東南アジア、韓国、および兵庫県、北九州をフィールドに、人間の社会と文化と、環境との相互作用を研究してきた。

おもに、山・川・海の資源配分をめぐる、社会関係資本としてのネットワークに注目する。地域の祭りを支える集団調査もその切り口の一つである。

主な著書、「森を守る法・森を破壊する法」『環境歴史学の探究』（分担執筆、橋本政良編、岩田書院、2005 年）

「山・川・海をつなぐ水陸両用の神々と水の技術」および「有明海の龍宮から佐賀平野を見る」『日本文化の空間学』（分担執筆、桑子敏雄編、東信堂、2008 年）

多良 正裕 氏（たらまさひろ、地域おこしグループさざんか塾塾長）

〔略歴〕

東脊振村役場職員、東脊振村商工会事務局長を経て 2005 年東脊振村長に当選。

栄西禅師が中国より茶種を持ち帰り脊振山に蒔いてから 800 年を記念した日本茶栽培発祥「聖茶まつり八百年祭」の企画、共同店舗推進など村の活性化に努めたほか、東脊振トンネル開通に向けて道の駅や温浴施設建設にも取り組む。三田川町との町村合併にも尽力。

現在は、地域おこしグループさざんか塾塾長、吉野ヶ里バンブーオーケストラ顧問、NPO 法人 Green Globe Group の顧問等を務める。自然環境保護や環境美化、地域振興に取り組むほか、里山保全対策として休耕田に地元子供クラブや町内の園児とともにコスモス、菜の花を栽培、食と農にも取り組んでいる。日本茶アドバイザーとして日本茶栽培発祥の地「霊仙寺跡」の現地案内や講演など幅広い分野でも活躍。

村岡 央麻 氏（むらおかあさ、佐賀県徐福会会長）

〔略歴〕

1988 年 夫・榮氏の死去後、株式会社 村岡屋 代表取締役役に就任。佐賀の歴史、文化、観光などの振興や賑わいづくりに参加するほか、「徐福」研究者としても知られ、徐福研究の講演やイベントを開催している。

2008 年 6 月 中国 連雲港市より「徐福が縁で両市の友好関係を発展させ、長年にわたって文化交流の拡大に大きく貢献した」として「連雲港市荣誉市民」に選ばれる。（外国人で 8 人目。国内では 2 人目）

2008 年 10 月 佐賀・徐福国際シンポジウムを開催。約 500 名の参加者が徐福に触れる好機となった。

現在、佐賀県徐福会会長、佐賀商工会議所女性会会長、恵比須 DE まちづくりネットワーク代表、西日本文化サークル理事長、(財)ユニセフ協会佐賀県支部副会長、佐賀市国際交流協会副会長など諸団体の主要役職を務める。

主な著書、『佐賀に息づく徐福』（2007 年 第 3 刷）

関連書籍、内藤大典著『吉野ヶ里と徐福－佐賀平野で始まった弥生文化－』（2008 年）

川上義幸(NPO 法人クリエイト九州理事長)

皆様新年明けましておめでとうございます。

本日のシンポジウムの主催をさせていただいております NPO 法人クリエイト九州理事長の川上でございます。一言御挨拶申し上げたいと存じます。

今日は、本当に寒い中、そして、年明け早々のなにかとお忙しい時期にこのようにお集り頂き、心からお礼申し上げます。有難うございます。

実は冬場なのでこういう寒い日になるのではと想定はしていましたが、まだ雪が舞っていないくて良かったなあと考えております。



昨年から、我が国経済は非常に厳しくなっております。今日の天候のような感じではありますけれども、まさにこういう時代には、経済の運営を的確にやる。そして、こういう時期だからこそ将来に目を向けて、「この地域をどうするか」「佐賀をどうするか」「九州をどうするか」「日本をどうするか」ということをしっかり考えなければならないと考えております。

NPO 法人クリエイト九州は、そういったことを少しでも考えて、将来の方向性に対して、議論のたたき台といいますか、話題提供をしようと、そういう活動を今やっております。

昨年ちょうど我が国の景気が悪くなった秋ごろ、日経新聞にあるアンケートの結果が出ていました。皆様も見られたかもしれませんが、「戦後、どういう時代が暮らしやすかったですか」というのを聞いたアンケートでした。

皆様方も考えていただければと思いますが、ある方は「高度経済成長期 1960 年代から 70 年代」。新幹線が開通し、東京オリンピックがあった非常に意気盛んな時というか、多少まだ貧しさは残っていましたが、将来もっと豊かになれるという希望と展望があった時代だろうと思います。

ある方は、「オイルショック後の 1970 年代後半から 80 年代」。景気・経済も比較的安定し、ちょうど中流社会、みんな中流だという意識があって、今のように地域格差のような話がなかった時代。

ある方は「バブルの時期」。土地や株が異常に上がってイケイケで物を買った時代。

ある方はその後の「失われた 10 年」。企業も経営体質を変えたり、家庭もいろんな改善をしながら「また新たにがんばらんといかん」と、こういうふうな時期をいわれる方がいます。

いろんなお考えがありますが、新聞に書いてありましたのは、そういうことをアンケートする上で念頭にあったのは、その時代、時代の空気、そして人の心、まさにそういったことを考えてアンケートしたと書いてあります。私もその通りだろうと考えております。

佐賀市から市政要覧というのが出ています。今日的に商店街が問題になっていますが、昭和 40 年代、50 年代、非常に賑わいをみせた時期でした。要覧に写真が載っていましたが、そこに写っ

ている雰囲気はやっぱり活気がありまして、人々の笑顔がそこにありました。今、地方のいろんな問題がありますが、きめ細かな部分まで中央集権的にやるのはなかなか難しくなっている。やっぱりそれは地域、地域で知恵を出しながら、明るく笑顔で出るようなことをやっていかないとけない。

そんなことを、さきほど言いましたように、NPO 法人クリエイト九州では勉強しながらいろんな提案ができたらと思っています。

それともう一つは、少子高齢化でこのままでは人口がどんどん減ってまいります。そうすると、景気や経済を活性化する、また、住んでいる人の多様なニーズを満足させるためには、ヒト・モノの流れを自由に動きやすくする交通インフラが重要になってくると思います。

それで佐賀空港を思い浮かべていただければと思いますけれども、佐賀空港と言えば地方空港として経営が厳しい事例として上がったり、無駄な公共事業のような言われ方、ネガティブな話がでてきますけれども、よくよく考えてみれば、佐賀空港というのは北部九州の真ん中にあるんですよね。いいポジションにあるわけです。

道州制、広域的に九州をどうするかという議論の中で、佐賀空港をどう使うか。使わない手はないわけです。もっとネガティブではなくてポジティブにこれを考えていかなければならない。

佐賀空港も、福岡空港が今後どうなるかによって位置づけが変わります。福岡空港の将来構想の議論の中に、新空港と滑走路の拡張とがありますが、佐賀空港、新北九州空港をどう使うか、連携するかという議論が吹っ飛んでいるんですね。

これは佐賀空港が交通アクセスが悪いという一言で一蹴されているわけですが、新幹線と絡めたときにどういうことになるかという、例えば新幹線を佐賀空港に持っていった時に交通アクセスの問題は大方なくなってくるわけです。そして福岡に新空港を造るよりも、もっと安くできることもあり得るわけです。

ですからいろんな可能性の議論を、こういう時代だからこそいろんな提案をしていく必要があると思っています。

そういうことで近々そういうことも提案させていただければと思っています。

ただ、今日は、そういった将来の佐賀、北部九州をどうデザインするかという前に、この空間はどういうところか、特に九州はアジアに近いわけですから、歴史的にみればアジアとの歴史・文化のつながりは深くこの地域に刻まれております。

そういったことをしっかり勉強しながら佐賀、北部九州の魅力をみんなで発見しながら、今後この地域をどうデザインするかということに持っていかれたらとそういうふうに思っております。

今日は、第一部の基調講演で、国土計画の第一人者であります矢田俊文先生に国土をどうデザインするかというお話をさせていただきます。

第二部は、佐賀の外からいろいろな佐賀の魅力を研究されています桑子敏雄先生、合田博子先生、そして佐賀の中からは徐福を研究されています村岡央麻会長、栄西に詳しい多良正裕塾長、佐賀をこよなく愛している荒牧軍治教授でパネルディスカッションをさせていただきます。

今日は、佐賀、北部九州についていろいろと考えるいい機会だと思いますので、皆様方も一緒に考えいただければ非常に有難いと思います。

最後に、今日お集りいただいた皆様方の今年一年のご多幸とご活躍を心から祈念申し上げまして開会のご挨拶とさせていただきます。

今日はよろしくお願い申し上げます。有難うございました。

「魅力溢れる北部九州の歴史・文化(空間力)を地域の発展にどうつなげるか

～これからの国土計画と国土形成～

矢田俊文氏(北九州市立大学学長)

私は九州生まれではありませんが、1982年に40歳のときに引っ越してきました。今、60数歳代の前期高齢者に入った段階で、そのうち27年がこちらの九州で、三瀬峠の向こうの福岡市西区に住んでおります。しょっちゅう、こちらの三瀬峠から川上峠のほうは、余暇があるとスッと来るのが大好きなので土地勘はあります。

元々専門は経済地理学ですが、大学で教えるのは最近評判の悪い経済学ということです。しかし、大学生の時は、地理学、文化人類学、人文地理学も学んでいましたのでそういうセンスはあります。この後のパネルディスカッションの先生たちは、そちらが専門で空間学を提唱されていますが、私のほうは空間経済論で、経済現象、経済的な運動法則が空間的にどう展開するか、それが地域や国をどう作っていくかという学問をずっとやっております。空間学を提唱される桑子敏雄先生と私はまったく違う空間学をやっていますので、その辺の違いも楽しんでいただければと思います。

最終的には、地域をどうするかということで、私の問題意識ですけれども、話をしてもうまく噛み合うかどうかわかりませんので、パネルディスカッションの先生方の話を楽しみにしています。よろしくお願いします。

さきほど紹介していただきましたように、九州大学にきてからのほうが国土交通省の国土計画にかかわってきました。しかし、東京にいた時は法政大学にいましたが、まったく霞ヶ関とは関係なく、あそこにいるとかえって国や政府と協力するという雰囲気はございませんでした。

こちらにきてから地域づくり、国土づくりに参加しまして、昨年の12月に国土審議会委員を10年の満期で退きましたので、肩書きから国土審議会委員がなくなりましたが、ほぼ20年間、国の国土計画の作成に関与してきました。国の課長以上が20人近くと大学の先生が十数人。世代交代はありますが、この方々で国土計画をつくってきました。その中で地方に在住していた数少ない一人でしたので、最終的には国土づくりのつくり方を地方に引き戻そうというのが私の狙いで、今度の国土形成計画はほぼそういう方向に大幅に転換しました。その辺も含めて話したいと思います。

◆新しい国土計画システム

皆さん初めて聞くかもしれませんが、全国総合開発計画が戦後半世紀、日本の国土をつくりあげてきました。国土をつくり上げてきたというのはオーバーですが、国の財政投資や道路・空港或いはダム開発、いろんな時代によって違いますが、公共投資等により、日本をこういうふうにつくり上げていくというデザインが全国総合開発計画でした。

したがって、地方における高速道路体系をつくったり、或いはいろいろ問題になっています大きなダムを造ったり、それからそれぞれの都市づくりをどう支援したりするのかというのが国の公共投資です。公共投資が各省庁の利益でバラバラにやられたのではということで、国全体がどういう方向でこの10年間の公共投資をどのようにするかという社会資本整備の指針としてつくったのが国土計画で、50年経ちます。2005年にそれをやめて新しく国土形成計画に法律を変え、おそらく今年の7月に第一期の国土形成計画が出来上がります。10年間のまちづくり、国づくり、社会資本整備の大きな指針をつくるという最終段階に入っております。後は北部九州或いはこの佐賀というのをどういうふうにその中で位置付けしていくかということになります。いってみれば、ずっ

と中央政府からの計画なので常に地域から異議申し立てがありました。中央からの計画の限界や、考え方も違います。今度の国土形成計画では少し目線をさげてブロックごとに自立的につくろうという方向に変わりました。

そして、今つくっている九州広域地方計画。荒牧先生も一緒にやっておりますけれども、この大きなデザインがあって、その後に個々のプロジェクトがでできます。プロジェクトはちょっとまだ詰めきっていない状況です。あとは、個別地域の福岡都市圏、有明沿岸地域をどう考えるかというのがありますが、次のパネルディスカッションにお願いしたいというところであります。

私は、九州大学の副学長から4年前に北九州市立大学の学長になりまして、大学改革をやっております。本職は、空間経済・地域構造論・空間構造論と、それを市場原理で解いていこうというもので、国土政策にも地域政策にも噛んでいます。国土審議会の委員として10年、その前に専門委員として10年やりました。そして最後の段階で今、広域地方計画の有識者懇談会のまとめ役として荒牧先生と一緒にやっています。

最近、九州地域戦略会議に関わっています。九州の方はご存知ですが、日本で大変珍しく7県知事と4経済団体が同じテーブルに着きまして、九州の戦略を議論し、計画を立てていくというのを2005年につくりました。観光をどうするかという話もありますし、それから、これからCO2を減らし低炭素社会をどうするかというのも戦略のテーマですが、もう一つが道州制をつくっていくというものです。その検討委員会の委員長で、昨年10月30日に骨格の答申を出しました。地方の行政のトップが集まってつくったのでは唯一です。しかも、九州全体が異論なくまとめたのはこれ一つだけです。今年3月までその委員長をやります。行政関係では高い評価を受けていますが、市民生活とどう関わるのかという肝心のところがまだ理解を得られていません。これからいくつか詰める必要があります。この延長上で今、次のパネルディスカッションの桑子先生たちに質問したいところです。

道州制が本州で進まないのは区割りがはっきりしないから。昨年の末から内閣府道州制ビジョン懇談会の専門委員会の委員長になりまして、区割りをする時どうするのかというところで今、議論しています。一体、空間学、歴史・風土・文化を入れた区割りとはなんなのだろうかというとなかなか難しい。私は是非これをベースに入れたい。しかし、有明海規模の地域の歴史・文化・風土はできても、そういうものに基づいた空間、区割りというのがなんなのか。一般に、経済の論理、行政の論理でやっていて、市民の地域感覚と違ったところで境界線が出来ていくのです。ちょっとこちらの空間学の考え方を導入しながら入れたいので、これも最後問題提起とします。歴史と文化の視点で、日本全体をどうグルーピング化するか。非常に面白いので議論したいと思います。

社会人口動向といいますか。要するに移動人口で入ってくる人が多ければプラスになり、出て行く人が多ければマイナスになるというきわめて単純なものです。1955年から2006年まで約50年を図1に落としてみました。いわゆる格差というのがかなり明確に出ています。

なかでも1960年代の高度成長期の人口動向をみてみますと、東京圏（東京、埼玉、千葉、神奈川）、関西圏（京都、大阪、兵庫、奈良）、名古屋圏（岐阜、愛知、三重）は人口が流入しています。この期間、東京圏は1年間で最大約40万人も人口が流入している。関西圏（京都、大阪、兵庫、奈良）は1年間で最大約21万人、名古屋圏（岐阜、愛知、三重）は約8万人の人口が流入している。しかし、それ以外の地方圏は1年間で最大約63万人もの人口が流出しています。

これが大都市集中構造をつくり上げてきた。しばらく社会移動は減少していくのですが、地方のほうが一瞬プラスになった時が2回あります。しかし、ほとんどの期間、地方から次から次へと人が出ていきました。特に佐賀あたりの山間部では当たり前の現象だったと思います。第二回目のピークが85年頃ですね。いわゆる円高が発生する頃です。第二のピークは年間20万人東京圏に行

っていました。現在第三のピークで、年間約 10 万人近く移動しています。

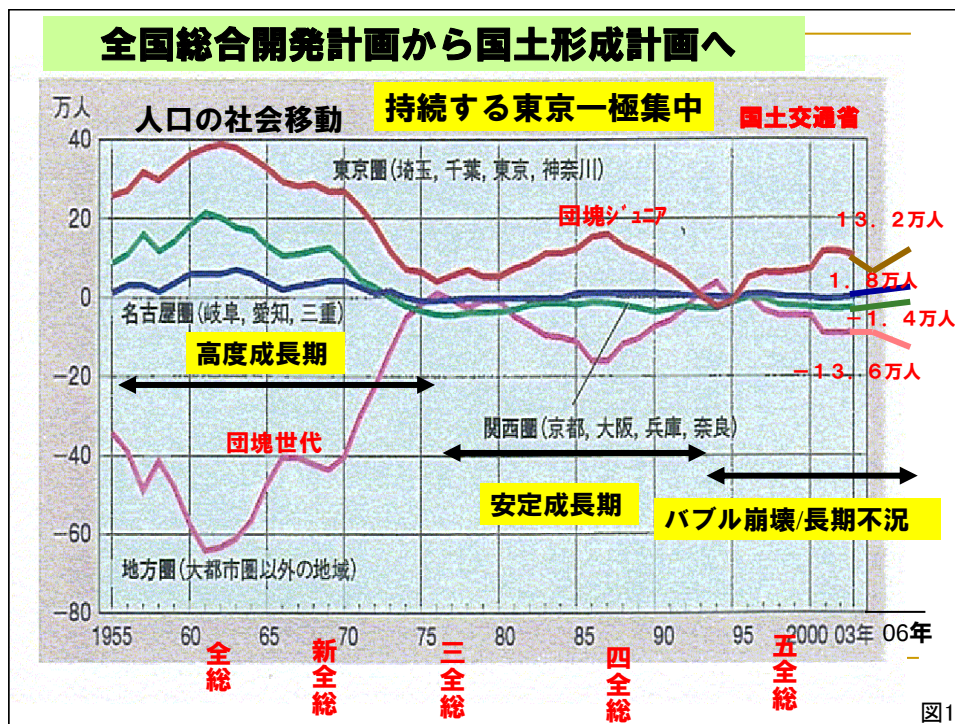


図1

こうした人の集中は経済成長すれば当然というのが経済学者の単純な発想です。しかし、人口構造も深くかかわっています。団塊ジュニアが 15 歳から 18 歳になった時、第二のピークとなっています。昭和 22 年生まれの農山村にたくさんいた若者がドッと都会へ出て、第一のピークを作り、高校進学率 90 何パーセント時代の団塊ジュニアが第二のピークを作った。一つは経済の成長で職場を求め、もう一つは、私立大学を求めて、関東と関西に行っていたことを示しています。

したがって、今もう一つの波が、不況になって尻すぼみになりつつある。簡単にいえば、東京の私立に進学させる人がガクッと減るだろう。その時、地方の国公立がもう一回息を吹き返すのかなという感じもあります。

トヨタを抱えている名古屋圏は堅調ですが、大阪のほうは新幹線効果でオフィスが東京一極集中になった。名古屋圏よりも人口流出がずっと続いているのは関西圏なんですね。首都圏への移動が非常に激しい。中京圏の微増と関西圏の微減。それから、地方では札幌、仙台、広島、福岡、新潟、岡山など地方の拠点都市への一極集中が見られる。それ以外のところは半島、離島、中山間地、それに中小都市も減少している。

佐賀県でいえば、唐津と佐賀を結ぶ線がありますね。JR 唐津線が走っています。そこから西側はほとんど人口が減少し、福岡という大きな都市の影響を受けている東側は人口が増加している。通勤圏に入ってくる。西側はそこまで入らなくなって人口が減少してくる。

熊本とか鹿児島とかはまた違ってきます。熊本は熊本都市圏中心に人口が動いていますし、鹿児島は鹿児島都市圏中心に動いています。

佐賀県は佐賀都市圏中心にして同心円的に人口増減していません。JR の唐津線から東西にかなり格差が出てくる。福岡都市圏の観光、三瀬とか七山あたりはたくさん行きますし、唐津までかなり行きます。もう一つ向こうにはなかなか行かない。観光の流れ、通勤の流れ、定住の流れも東西格差が出てくる。これはもう大きくいえば、福岡都市圏、そして地方の成長の中でどういう形でその風を受けているかとなる。これを無視して単純な地域自立論をやっても難しいのかなというところですよ。

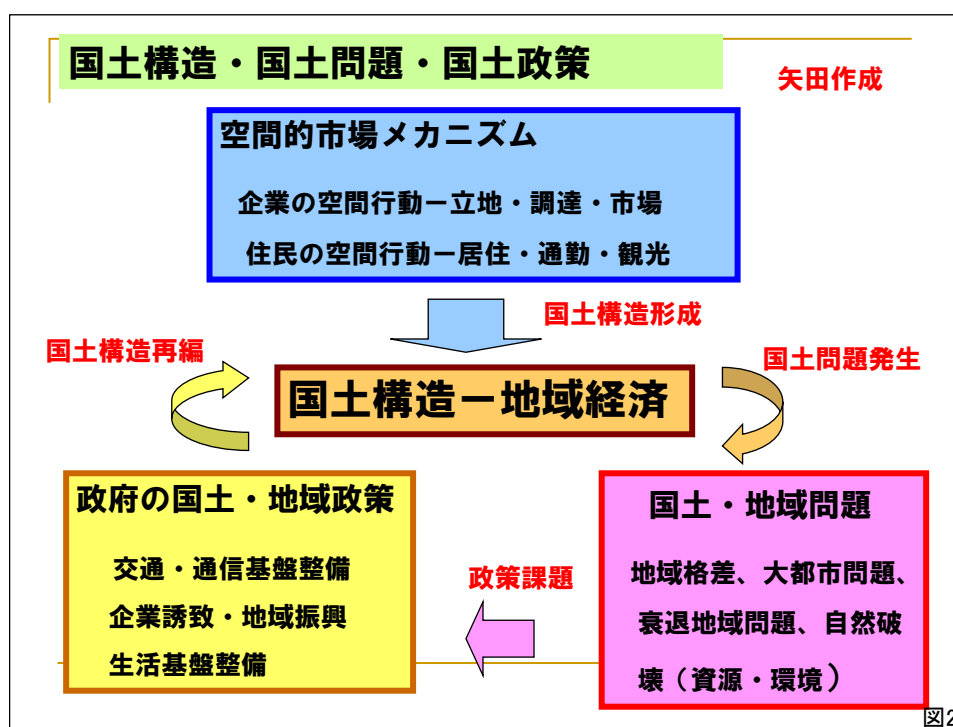
我々は、地域格差問題、衰退地域問題、自然破壊問題というたくさんの国土問題を抱えています。

これはなぜ起きたかという、政策の失敗というふうにストレートにいいますが、そういう側面も否定できないんですがそれだけではない。

企業は最適なところに工場を造り、最適なところから資源を調達し、そしてマーケットに販売する。これは国内だけでなく世界的なレベルで自由になってきています。関税が低くなればなるほど企業の空間行動は地球規模になります。

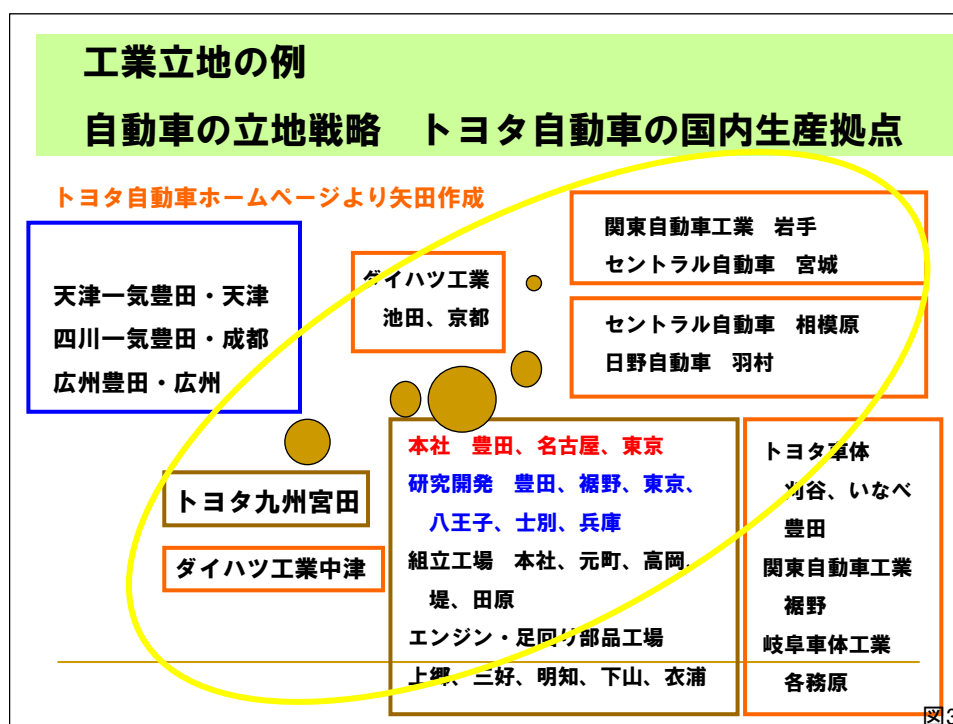
それからもう一つは、職場の立地がこのようにして決まると、それに伴って若者が動く。日本の人口移動の最大の部分は 18 歳の高卒段階で地元を離れることによります。今、大学進学率 51~52 パーセントですから、二人に一人は大学に行って、大学はどこにあるかという一に東京圏、二に関西圏、三に福岡都市圏です。これを選択しますから、佐賀の高校を卒業しても、佐賀県の吸収能力は非常に少ない。佐賀大学等に行く人が非常に少ない。結果的に大学進学すると地元を後にし、戻ってくる確率がかなり低くなります。社会的移動は、居住であり、進学であり、通勤であります。

この企業と個人の立地選択の中で国土構造は決まってくる。したがって佐賀のおかれている地域も決まってくる。それがさっきいった格差問題を発生します。自然破壊だって、山間僻地で働く人がいなくなりますと耕作放棄地がたくさんできてきます。それを個人では処理できなくなってくる。これは市場が、企業や個人の立地選択という市場が作り上げた構造です。



これまでいってきた空間的市場メカニズムでは、もともと水資源、森林資源も炭酸ガス排出もなかなかコントロールできない。国土管理というものを中央・地方政府がやらざるをえないわけです。空間的市場メカニズムで日本の国土がつくられているわけです。その結果、とても耐え難い国土・地域問題がでてくると、政府の国土・地域政策が必要になります。国が生活基盤を整備する、下水道を整備し都市的なものにするとか、交通基盤を整備するとかが行われます。いわゆる企業や住民から選択されるような地域にするためには、政府の国土・地域政策がポイントになります。そして、それがうまくいくと、企業誘致につながっていきます。NPO その他が一所懸命動きながら、自分の足元に何が起きてくるかということを経営・地域問題として世の中に提起していく。我々、学者はそういうのを空間の論理としてとらえる。最終的には、国土・地域政策として政府のやる仕事となります。(図2)

二つだけ具体例を出します。
トヨタは工場をどう配置するか考えます（図 3）。



固有名詞をいわなくてもわかると思いますが、現在は圧倒的に豊田市にあります。最近アメリカ、中国に出ていっていますが、国内向け、次の国内の拠点として面白いことに関西圏を飛ばし、中国地方を飛ばし、いきなり九州に来ています。

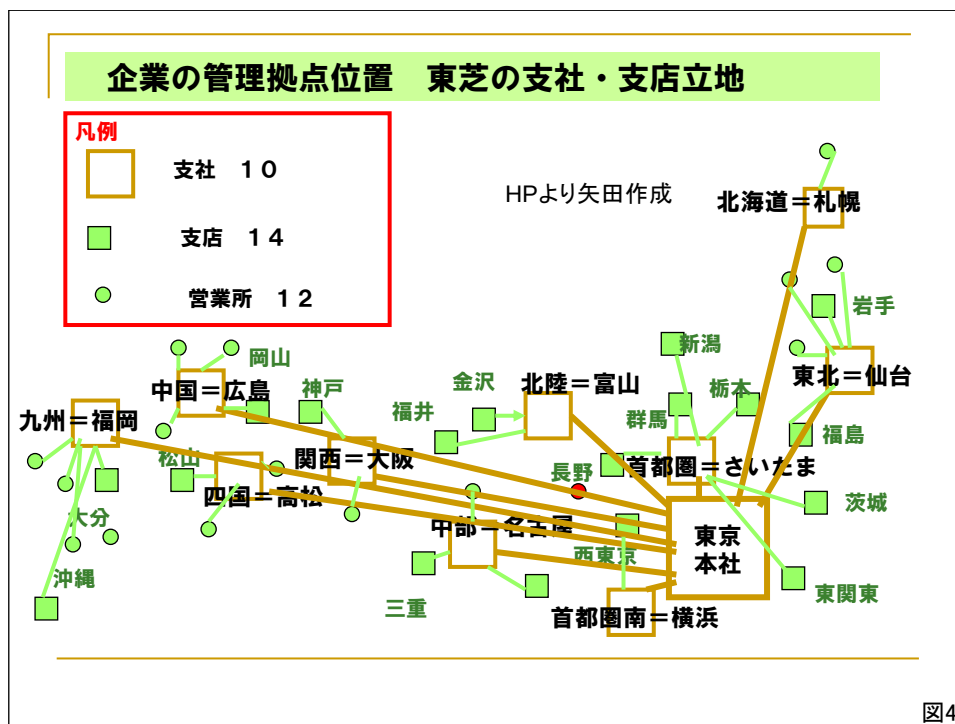
いってみれば、自動車産業は、東北自動車道から太平洋ベルト地帯を通過して熊本近くまで立地していますが、この中で関西圏と関東圏を避けているのです。これは経済原理なんです。これらの拠点が別の会社の部品供給の拠点になっていたりすると、そういうところにある中小企業を混乱させたくないのここを避けて、自動車部品確保にとって処女地である東北と九州になったわけです。何よりも九州に集積すると東アジアとの部品交換、技術移転に有利になっていきます。東北よりはるかに魅力的なので十数年前に進出しました。今や100万台を超えて150万台、年間1000万台ぐらいの日本の自動車生産量のうち10パーセントから15パーセントまでになっています。

そして第三拠点をつくるとなると、依然として山陰でも南九州でも、北海道でも、北陸でもない。完全にベルト地帯の中を選択的に拡大し、最も九州に近いベルト地帯の延長というところに行きますので、好んで投資するところは限定されてきます。離島が厳しいので離島に工場造りましょうというのは企業論理としてない。

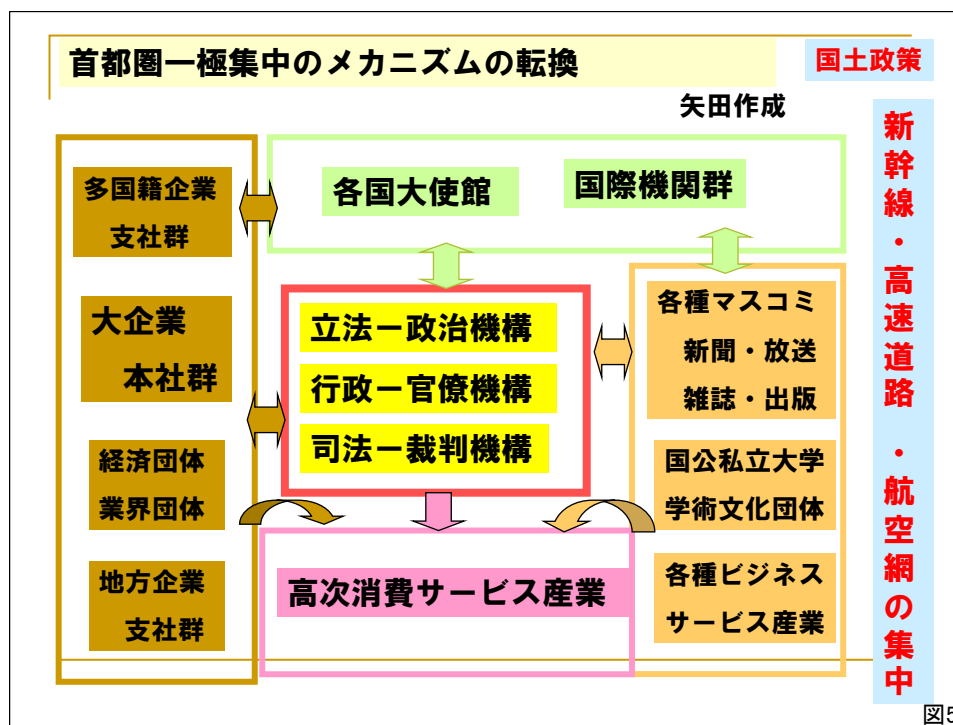
もう一つ成長する電機大手の例です（図 4）。今度は工場ではなく、営業拠点に焦点をあててみました。ある面では人材を確保する拠点でもあるのですが、この拠点の実態をやはりホームページから私が半日ぐらいかけてつくりました。

東芝の本社は東京芝浦に拠点を置く。その次の営業拠点は名古屋と大阪に置く。次は札幌、仙台、広島、福岡です。こういう形でブロック拠点をつくります。従業員を入れますとこの格差が出てきます。

大変面白いことにほとんどの日本の会社が同じような配置をします。関西拠点の日本生命、松下、こういうのも東京に事実上の本社を移す。そのため、上から見るとヒエラルキー構造になっています。ヒエラルキーができて、その中で札幌、仙台、広島、福岡というのが地方への投資の中心となる。



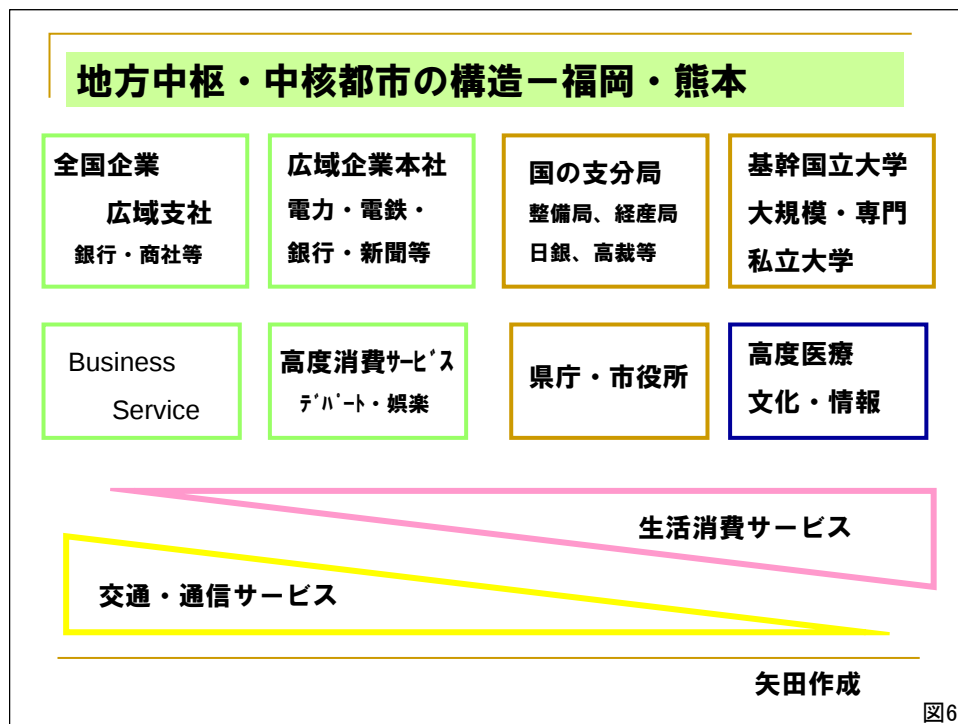
アメリカはこういうことはありません。多くの企業本社がニューヨークに集中しているわけではありません。金融は集中していますが、シアトルにボーイングがあり、鉄はピッツバーグ、自動車はデトロイト、それぞれ拠点が違って、それぞれにヒエラルキー構造を作っています。日本はほとんど東京に本社を置いている。



したがって、さきほどいった地域格差構造が固定されてくる。例えば（図5）東京であれば三権の中枢がここにあります。一方で大企業の本社群が、経済団体が、そして地方企業もここに拠点を置く。そして世界の企業もここに拠点を置く。民間の企業群の集中です。それに応じて情報収集するマスコミが出てきて、マスコミの全国的コントロールまで始まる。要するに地方局というのは自分でつくる分野が非常に少ないですから、お笑い番組を民放がやると一斉に日本人が全部その番組を見ざるをえないということです。これはむしろシステムの問題で、文化の問題というよりも放送

権がなくなりますから。大学も圧倒的に首都圏と関西圏に集まってくる。したがって九州大学、福岡大学、九州産業大学とかなりの数の大学がめずらしく福岡にはありますが、それ以外の佐賀とか長崎とかいうのはどちらかという国立しかやっていけなくなる。いろんなシンクタンク、その他のビジネスサービス、こういうものがどんどん、渦のように日本中から首都圏へと人と情報と金を集めてきます。国土政策で一極集中やめましょうといっても計画に書くことは簡単ですが、市場メカニズムですからそう簡単ではないし、まず不可能だろうと思います。

同じように札幌・仙台・広島・福岡というのは何で成長しているのか、佐賀とどこが違うかということも市場が決めている。

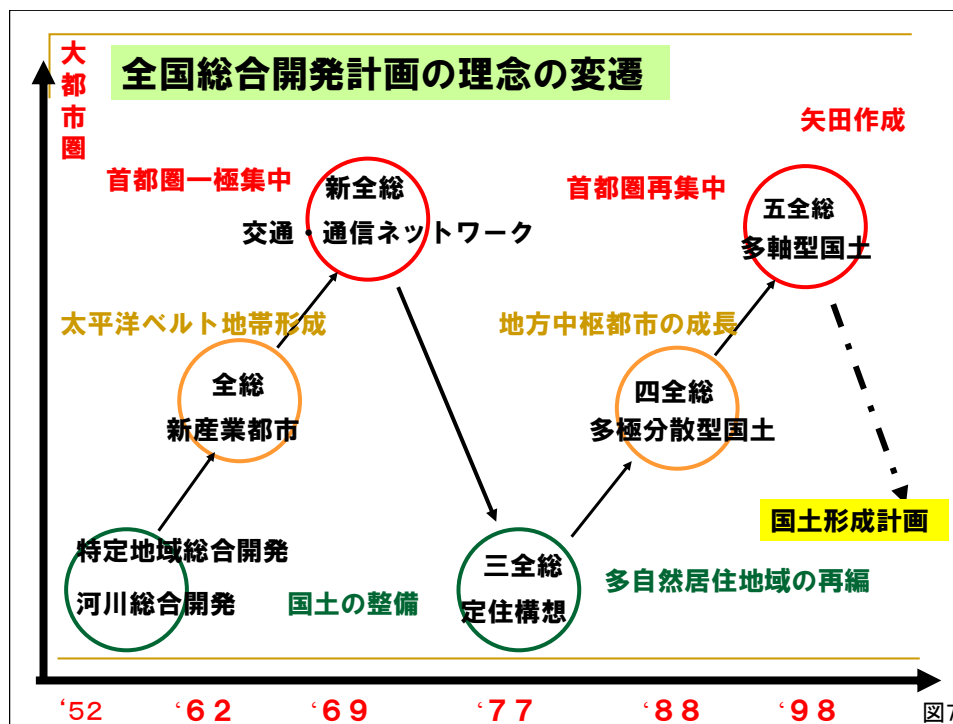


福岡は（図6）、国の支・分局、九州地方整備局、九州経産局、日銀、高等裁判所のほか、電力、電鉄、新聞というブロックを相手にした巨大企業の本社、JRと九州電力です。そして九州大学、福岡大学、九州産業大学という学生を集めてくる基幹的な国立・私立大学がある。これに全国企業の九州を管轄する東芝等の支社ネットワークがここに入ってきます。こういうものがあってブロックの人・情報・金をかき集めていく。したがってシンクタンクもあり、ビジネスサービス関係、高度消費サービス関係、ソフトバンクのドームとかですね。また、九州大学と結びついて、かなり高度医療が集中する。これもまた地方のミニ東京という形で動きだします。こういう形でつくられた国土構造というのは、世界的に言えばイギリス、フランス、日本、韓国というのがほぼこれに近い。ドイツ、アメリカやカナダというのはもう少し多極型になっています。

このような状況でどうやって国土政策をやるのかということ大変難しいんですね。マスコミは、一極集中とか、地方の活性化とか、ずっと国は打ち出すが成功したためしがないじゃないかと叩くんですが、マイルドにするために努力するのであって、国土構造を大幅転換してがらりと変えるというのは、皆さんが自由に居住地を選び、企業が自由に選んで、市場主義社会である以上そう甘くはない。また、とくに日本のように価値観も画一的に動きやすいところはとくに難しい。

しかし、地域問題を改善するため全国総合開発計画をつくって半世紀やってきました。

約半世紀、一全総、新全総、ここから番号で、三全総、四全総、五全総と続けて、ここでやめました。その前には国土総合開発という特定地域総合開発、ブレ全総みたいなのがあります。全国総合開発計画の理念の変遷を見てください。（図7）



横軸はつくった年次で、だいたい10年のつもりでつくって8年ぐらいで変えていっています。四全総はちょうど10年かかりましたが、五全総も1997年から2005～6年でやめています。

縦軸は人口密度の多い地域を上には書いているのですが、大都市圏と地方の多自然地域の対比です。計画はどこにフォーカスしたかということです。ここの1953年に筑後川大水害が起きましたが、水害多発の時期です。洪水を防ぐためにダムを造り、食糧増産で水田を整備したりしていきます。特に筑後川水系の大きなダムはほとんどこの時期に計画しているのではないのでしょうか。この特定地域総合開発計画で日本中の主要河川の総合開発が行われ、国土が安定しました。次に60年代に入ってから工業都市づくりをやった。鹿嶋から大分までの間のベルト地帯に工業用地を整備していきます。特に、瀬戸内海と東京湾がきれいに臨海工業地帯になっています。これによって、鉄鋼、石油、化学などの素材型重化学工業が成長しました。

そして1969年の新全総では何をつくったかという高速交通体系網の計画をだした。高速道路網、新幹線網、空港網、主要港湾網というのをだします。戦後初めて、日本が交通通信ネットワークでマーケットが統一されていくという時期です。私はこの五つの全総の中で新全総が日本国土づくりに決定的な役割をしてきたと思います。新幹線沿いにアクセスするとずっとどこにでも行けるというメインストリートをつくって、そしてメインストリートに合わせるようにネットワークができあがってきた。今度は航空網ができあがってくる。半日ぐらいでだいたいどこでも行けるようなネットワークをつくった。そのお陰で人、モノ、情報などすべての流れが東京に集まるようになってきている。ここから大阪の落ち込みがでてきます。大阪圏のオフィスが相当弱くなってきます。名古屋圏は元々オフィスは強くなかったんで、ものづくりを強化しまして、大きなダメージを受けなかった。

これでちょうどさっきいった年間20～40万人も東京に行く時代で、地方がかなり荒れてきたので地方を手当てするというのが三全総です。珍しく地方に力を入れました。これはあまり効力なく終わって、四全総となった。これがむしろこの地域も強化するよりも地方に極をつくって、そこを中心にして地域をつくっていかうというので、札幌、仙台、広島、福岡というところに相当公共投資を配分して、地下鉄等都市の軌道系が整備されていきます。従って、極となる福岡は人口も増え、それこそ三瀬峠を越えて佐賀にまで相当影響力を持ててきます。

四全総が極点ですね。その次、軸をつくることになった五全総。これは私もかなり中心的につくったんですが、どうも文章が一人歩きして、簡単にいうと高速道路のイメージでしか捉えられなかった。国土軸の形成は、地方圏からは交通基盤の整備とも受け取られた。その中で、大都市のリノベーションと称して、首都圏を中心とする大都市における建築規制を徹底的に緩和し、お陰でできたのが品川や浜松町、六本木で、高層ビルができあがった。首都圏再集中が起きました。地方は特に大きなプロジェクトがなかったということで高速道路に対するブレーキが一気にかかりましたので、この辺からまた新たな地域格差が出てくる。

こうした全国総合開発計画で何が問題（図 8）かということ、一つは複雑で国土計画に関する多権の法律はプロ以外はどういうつながりかよくわからない。

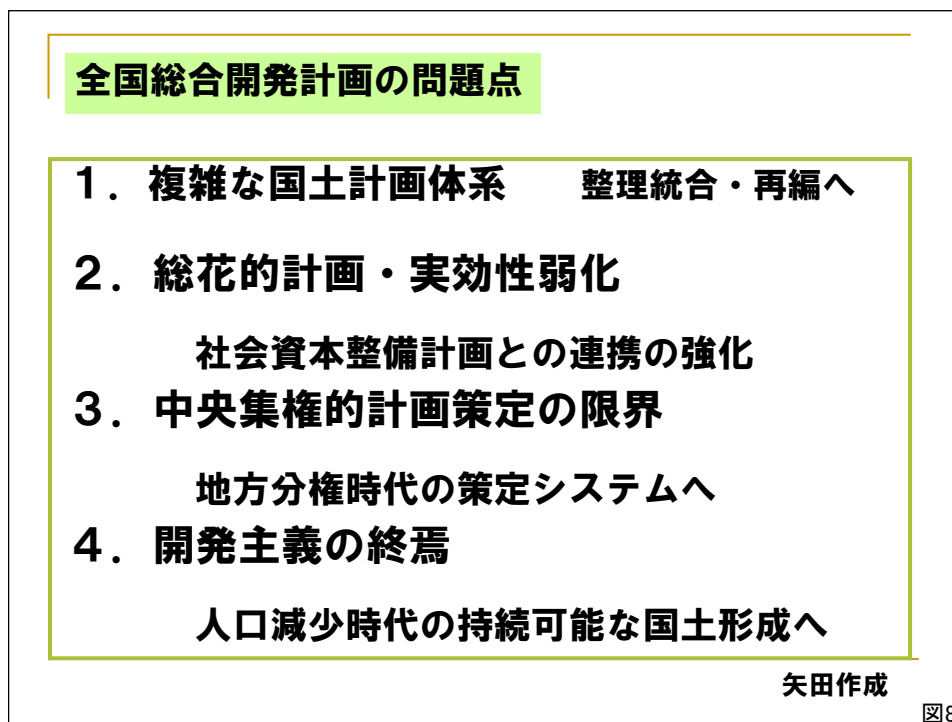


図8

県の企画課長というのはこれをよく知っています。過疎法を使ったほうがいいか、農村整備法を使ったほうがいいか、いろんな法律を使って、どこの省庁のどのプロジェクトをとると有利かを考えます。いかに国の補助金を持ってくるかというところが地方自治体の仕事になってくるわけです。考えてみるとあまりにも中央省庁依存になるのですね。ですから建設省出身の首長というのは非常に大きな力を持ってくるんです。お金の出方をよく知っていますから。

福岡市と北九州市は、どちらもほぼ同じようなことをやってきた。人工島を造り、いろんな軌道系づくりをやったんですが、赤字の度合いが福岡のほうがきついんですね。一応国から半分、残り地元負担というのを両都市ともやるんですが、地総債という後で交付金でまた四分の一が戻ってくるお金を北九州市長は使っています。一つのプロジェクトをやるのに費用四分の一でつくっている。福岡市は一つの仕事をするのに半分のお金、したがって人工島というのは非常に強い赤字体質になってきますね。それも一種の中央集権をどう活用するかという話です。地方分権を望む市民から見ると非常に屈辱的なんですが、行政から見るとそれによって市民の財政を、税負担を少なくする技術だということになります。

そういうことがあまりにも複雑になってきて、一体日本の国づくりの金の流れはどうなっているかと、本当にわかっている人は非常に少ない。しかも、いろんな社会資本整備計画について、書くことは書くが実行段階でいろんなトラブルに巻き込まれていく。

それから私が一番気になっているのが計画における中央集権主義。この10年や20年やってい

るとほとんどの計画は霞ヶ関と東京の大学を中心とする先生がつくっている。全然悪意はないんですが、明らかに土地勘といいますか、地方をしっかりと知っている人が少ない。どうしても東京から見た目で北海道から沖縄までつくってしまう。

過疎問題については、治療に効く「抗生物質」はない。ところが、必ず抗生物質があると思って計画に書くんです。ちょっとしたアイデアを。

しかし、この半世紀あれだけの市場メカニズムの中で若者が出て行くことを止めるなどということは、多少の治療、例えば由布院とか個別に努力はあったとしても、全体の流れを止めることはなかなか難しい。難しいどころか無理である。そういうところをできると思ってできのいい官僚が書くんです。難しい。これはもう地方を知らない人たちがつくるべきでない。

我々の時代は地方出身の官僚がかなりいたんです。今やほとんど東京の名門中・高校の出身で土地勘がまったくなくて、たまたま旅行したぐらいの土地勘の話をされる。これを切り変えないと国づくりはできない。もうインフラは基本的にほとんど終わった。地域づくりをどうするかというのは地元を担当させたらと、これがポイントなんですね。

もう一つは、開発主義。何とか設備投資すれば人が来てお金が回るという。これもそろそろ人口減少時代で不可能になってきていることです。炭酸ガスであり、緑であり、水でありというところが非常に重要になった時に、もう哲学を変えないとまずい。全国総合開発計画の問題点に掲げている3、4（図8）がですね。ちょっと計画づくりを変えようとしても、国の財政に依存する以上は国の公共投資の方向性があるんで、国土計画はいります。

変えるためにこうした「国土計画体系専門委員会」と「国と地方の役割分担研究会」をつくって、その後この二つを一緒にした制度検討委員会をつくり、まとめていった。（図9）

「21世紀の国土のグランドデザイン」から 新たな国土計画体系の確立へ

「**現行の国土計画体系は、――国土計画の理念の明確化の要請や地方分権、行政改革等の諸改革に対応する必要が生じている。このため、国土総合開発法及び国土利用計画法の抜本的な見直しを行い、――21世紀に向けた新たな要請にこたえ得る国土計画体系の確立を目指す。**」

国土計画体系専門委員会（星野道保委員長）99.7-00.11

国と地方の役割分担研究会（矢田俊文座長）01.7-01.11

制度検討委員会（森地茂委員長）03.7-04.2

国会成立 05.7 国土総合開発法改正→国土形成計画法

国土利用計画法の改正、大都市圏整備法の改正（首都圏、近畿圏
中部圏一事業計画廃止、地方開発促進法の廃止

矢田作成 図9

委員会では国土利用法と国土計画法を一緒にすることを提言予定だったのですが、これが法的に無理だということでつぶれたんです。私が座長の「国と地方の役割分担研究会」がそっくり今の国土形成計画法の骨子になりました。わずか半年ぐらいの議論ですけれども。その後、05年から4年も経ちますが、4年後に国土形成計画法をつくります。

それはどういうのかといいますと、計画づくりの中央集権主義型から地方分権型への転換といえます。全国計画と広域地方計画の二つに分け、全国計画は従来通り地名はほとんど入らない。つま

り国のデザインを大雑把に示すだけ。そして、地名とプロジェクトをきっちり列記するのは地方でつくる。地方でつくるのは国の地方支・分局長と知事と政令市長と地元経済界の人たちが協議会をつくって対等な立場で議論する。それで、大きなデザインをする段階の助言を学識経験者がやる。私はこの座長ですが、荒牧先生も入っていただいて10人ぐらいでやっています。要するに、叩き台をこちらでつくって、そしてここでかなり激論するというスタイルをとっています。

全国計画（図10）ですが、あまり解説する時間ありません。



図10

簡単に特徴をいうと、産業の話、経済の話はほとんどありません。要するに安倍内閣の時代の叩き台ですから、美しいとか環境が一つですね。それから、これから30年以内に起こるであろう巨大地震対策に今から投資を重点化する。災害には、もちろん九州のように台風災害も入ります。開発主義の後退です。

そして、地域づくりもそろそろ行政だけでなくNPOを中心とした地元の力を借りてやりましょうという。さきほど極＝点から軸＝線へ。今度は広域ブロックが自立的に発展する。これがキーワードです。要するに点から線へ、そしてブロック＝面の自立というのをしています。

九州の話にいきます。広域地方計画作成が地方分権型に切り換えたということになっていますが、本当に分権かなあというところが私にはあります。地域住民の声を吸収するシステムは出来上がっていない。ただ、霞ヶ関で特定の人たちが学問的知識とそれから官庁間の調整でつくりあげられた政策ではなくて、ブロックでつくりましょうということで、それが大きく切り換わっています。そこで、九州の戦略はこの四つをきちんとやりましょうということですね。（図11）

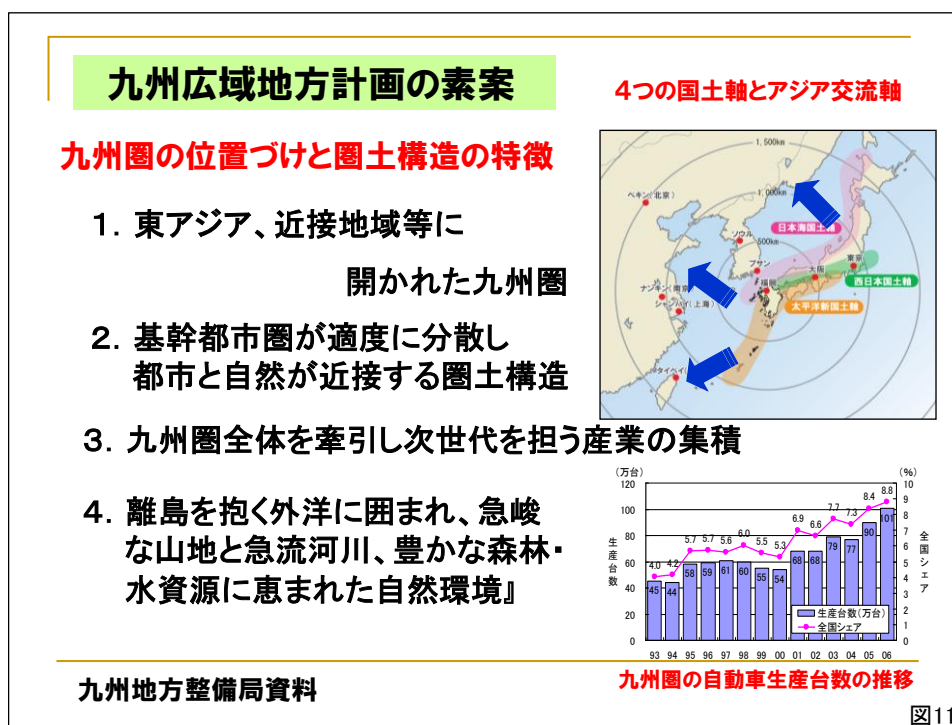
一つはアジアとの関連をどう政策に活かすか。

それから九州には、これらの大きな都市が、100万都市が二つあり、60万都市が二つあり、40万都市が二つある。東西南北にきれいに配置されています。九州だけにみられる多極型の国土構造を、どう維持して強めていくかということになります。首都圏は東京一極です。関西圏は京阪神三都物語です。東北圏は仙台以外の都市が弱すぎるんです。中国地方も山陰の都市が弱すぎる。それに対して結構九州では大きな都市が非常に多い。

第三は九州らしい産業集積をどうするか。

第四に、これだけは九州特有なんですが、外洋性離島という奄美と五島、対馬を抱えています。

これは特段の政策的な資源配分をしないといけない。今まで東京でやっていた時はほとんど防衛上の観点重視の議論が先行していたんです。この奄美と五島と対馬の置かれている状況に対してどうするかという話です。



意外と離島だと医療が大変だとすぐいわれるんですが、奄美は徳州会が非常に強い勢力でやっています。じゃあ離島問題はないかということではなくて、特性を考えながらやらないといけない。

医療問題でいうと、椎葉など山間地とかの方が大変なんです。循環器系の病気が起きた時、血が大量に出るとか、脳溢血とか、心臓マヒとか、循環器系は30分以内の対応が必要です。この地域は病院まで2時間以上かかるということでもうあきらめている。ヘリコプターをすぐに飛ばせるような体制にしない限りは無理です。宮崎県だけで対応しているとお金もないので、その辺は九州全体として取り組みましょうということになります。

今、荒牧先生と私たちがやっている懇談会で、だいたいのデザインをつくり、最後、各県知事と各支・分局の局長が集まって、後2回ぐらい開いて7月頃に決めることになります。その間に意見公募があるんだと思います。こういう形で分権型をやっているんですけども、本当に分権というのはなかなか難しい。

圏土構造というのは九州の計画で開発した用語ですが、今、ほとんどの地域でこういう名前を使っています。それから災害集中地域は九州にあります。地震というよりも暴風雨、台風とかですね。そしてこの4、5、6（図12）は少し、三層の自立圏といういい方をしています。時間がないのでポイントだけ。

まず、九州自体の自立を図りましょう。そして、福岡、北九州、佐賀・久留米、長崎・佐世保、熊本、宮崎、延岡、大分、鹿児島を核にしたしっかりとした都市に周辺地域とのリンケージを強めてここに主要な都市機能の整備を図りましょう。もう一つ下の都市には生活機能の拠点をつくっていきましょう。これで三層の自立圏域をつくりましょうということです。

経済地理学にレッシュ理論というのがあります。市場メカニズムによって一定の地域に拠点都市を中心にサービス網が整備される。医療のように市場メカニズムプラス財政投資でできるものもあります。

この市場メカニズムによってだいたい人口5万から、伊万里とか唐津とかいうイメージ、ああい

うところを中心に第三の自立圏ができます。このメカニズムを強化して、医療、介護関係の拠点を整備する。そして第二の自立圏については情報拠点、高等教育、大学の拠点、それから高度医療の拠点として整備していきましょう。そして九州全体が脱中央依存体制をつくりあげ、アジアとリンクageするというのがこの戦略なんです。

新たな九州像の実現に向けた戦略(概要) - 7つの戦略

1. 東アジアへのフロントランナーとして発展する九州圏の形成
2. 基幹都市圏を核とした多極型圏土構造と九州圏の一体的な発展
3. 災害・環境ハザード最前線における安全・安心で美しい九州圏の形成
4. 基幹・拠点都市圏と多自然居住地域の交流・連携による都市自然交流圏の形成
5. 生活中心都市を核とした安心でゆとりある基礎生活圏の形成
6. 離島・半島、中山間地域等の地理的制約を克服する豊かな定住環境の確保
7. 九州圏の各地域の個性を活かした先導的な地域づくり

九州地方整備局資料

図12

東アジアへのフロントランナーとして発展する九州圏の形成

- 1-1. 九州圏の個性と魅力を創出する国際交流。協力の推進
- 1-2. 東アジア経済圏の確立とアジア規模の知的拠点の形成
- 1-3. 九州圏の持続的な成長を実現する成長型・牽引型産業群の形成

カーアイランド

シリコンアイランド

フードアイランド

観光アイランド

- 1-4. 東アジアへの近接性を活用したフード・観光アイランドの形成

- 1-5. 新たな発展を実現する東アジア、広域ブロックとの交流・連携の推進

- 1-6. 身近になる近畿圏との観光・交流の推進

九州地方整備局資料

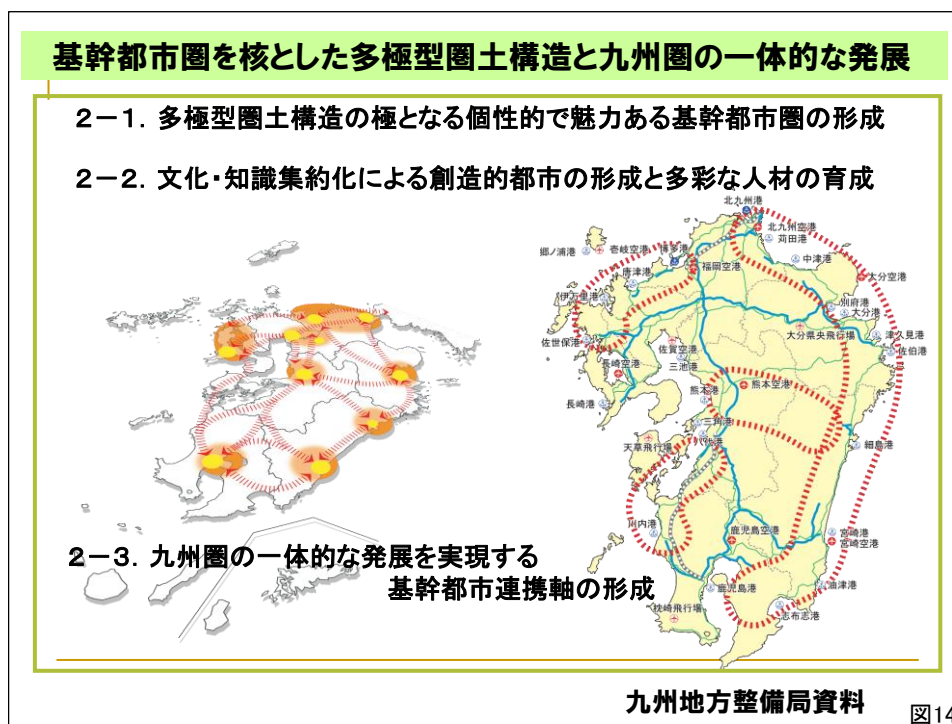
図13

そして第一の九州圏の自立にとって重要な課題の一つがアジアとの関係をどう構築していくか(図13)。トヨタ、日産の落ち込みというのは、アメリカ市場で車が売れなくなったんで宮田と苅田が落ちていくという構図です。今後は国内市場プラスアジア市場ということで強めていこうということで立て直すしかない。

そして今、安全・安心問題で脚光を浴び始めた農業。これは、九州の得意なところであって、安全・安心・おいしいというところで北京、上海市場で九州の果物が相当良く売れている。前は圧倒

的安い中国の農産物が入ってきて、九州の農業は死滅するという議論があったんです。今や中国が成長して所得が向上すると日本の食品、九州の食品が売れていく。だいたい10年まえに予測した話と全然別のことが起き始めている。こういうのを取り込んで、東京市場との結合よりも、アジア市場との技術連携、マーケット連携を強めていこうという話です。

もう一つは観光ですね。円高で韓国からの大量の観光客がピタリと止まりましたけれども、ウォン高の時は韓国の人が圧倒的にきましてゴルフと温泉を楽しんで帰っていったという時代がありました。まあそのような観光は為替相場によって決まります。そういうことをうまくやりながら活性化を図っていこうというのが一つですね。



それからさきほどいいました圏土構造（図14）。久留米、佐賀、福岡、北九州の関係です。ここは新幹線で20分、特急で30分です。北九州から、間もなく、新幹線で結ばれます。新鳥栖駅は麓の辺りにできます。もうほとんどこの辺は日常生活の行動範囲となる。これが北部九州の一つの都市圏と考えていくか、やっぱり佐賀・久留米は一つの自立圏にするかという非常にむずかしいところです。長崎はこれを中心にしてどう生活・情報拠点を整備し、それに関する道路整備をやっていくかという話だと思います。

この図15は災害に関するものですが、緑の濃い線が分水嶺です。青いのが水系です。簡単にいうと九州山地から東西に河川が流れていく、背振山地から南北に河川が流れていく。九州は、この骨（山地）を境にしてできあがっています。まあ文化領域論というのはほとんど地形によってできあがってくる。したがって、嘉瀬川水系とか、筑後川水系というのはこういう形でできあがっていて、河童伝説にしろ、文化は流域ごとに育まれていると思います。

したがって、国土づくりとか、災害、生態系、景観を考えるのは、流域を単位につくっていかないといけない。

閉鎖性海域というのがあります。一番早く問題になったのが琵琶湖、その次に有明海です。八代海はまた別の問題でかなり深刻になりました。また、錦江湾、博多湾、大村湾です。流域からゴミが流れてくることからわかるように水系と一緒に考えなければならない。これを一体どういうふうにやっていくのかという国土政策が必要です。流域圏単位で景観、災害、水循環、森林とかを考えるのがポイントとなります。

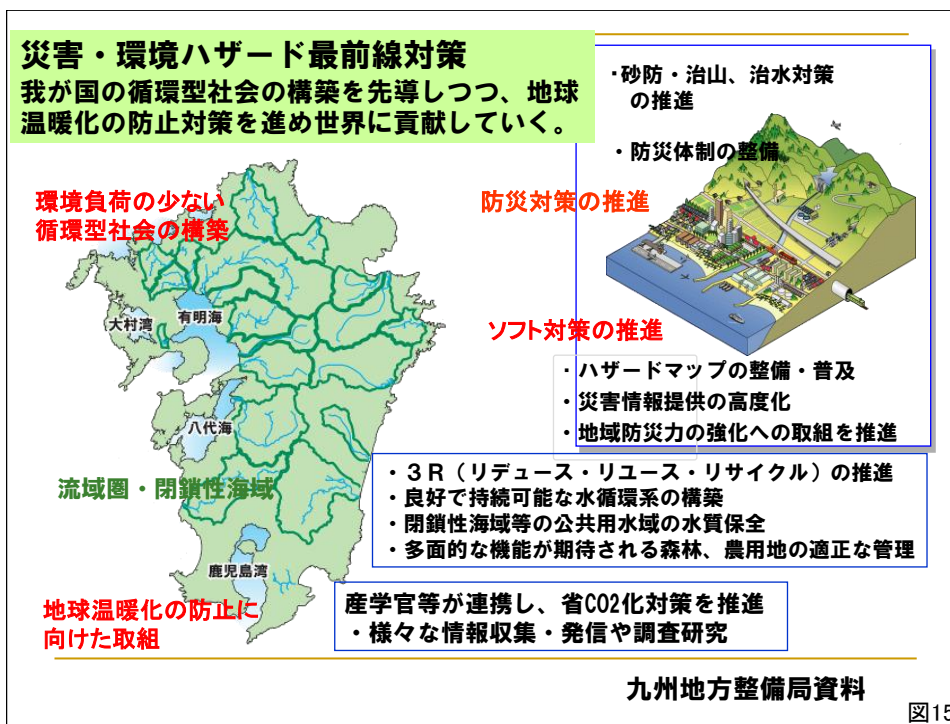


図15

我々は、有明海を県境なんて意識しないで活用し、恵みを受ける。関係者は、漁民・農民・市民・企業・研究機関・大学。ところが不思議なのは行政（図16）。有明海は、長崎県、佐賀県、熊本県、福岡県が管轄してます。そしてその下で沿岸市町村も当然管轄しています。大分県も筑後川という点では水系として関係している。

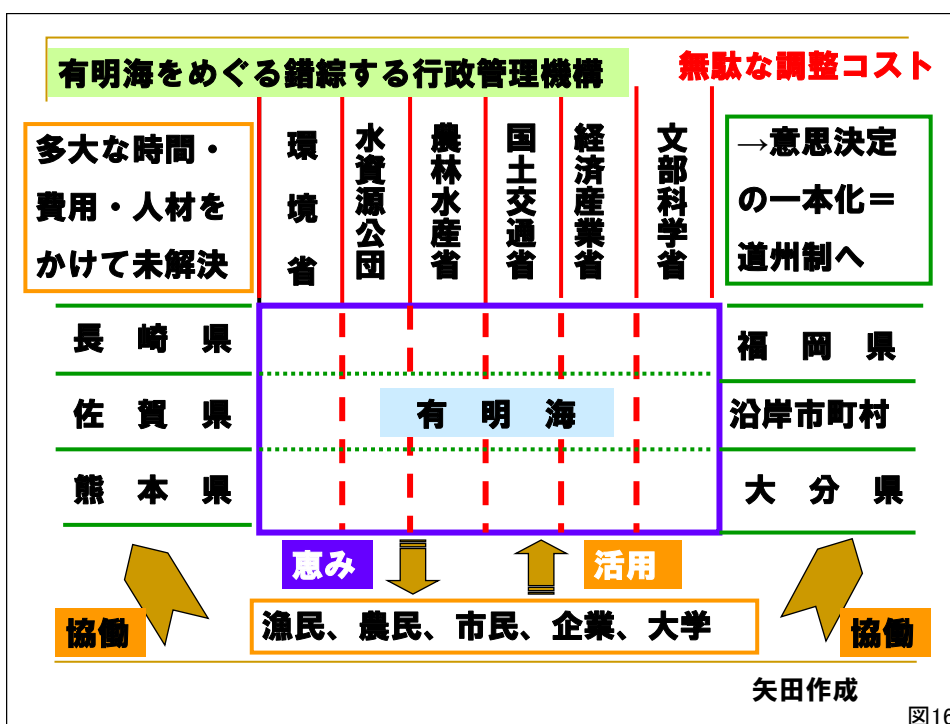


図16

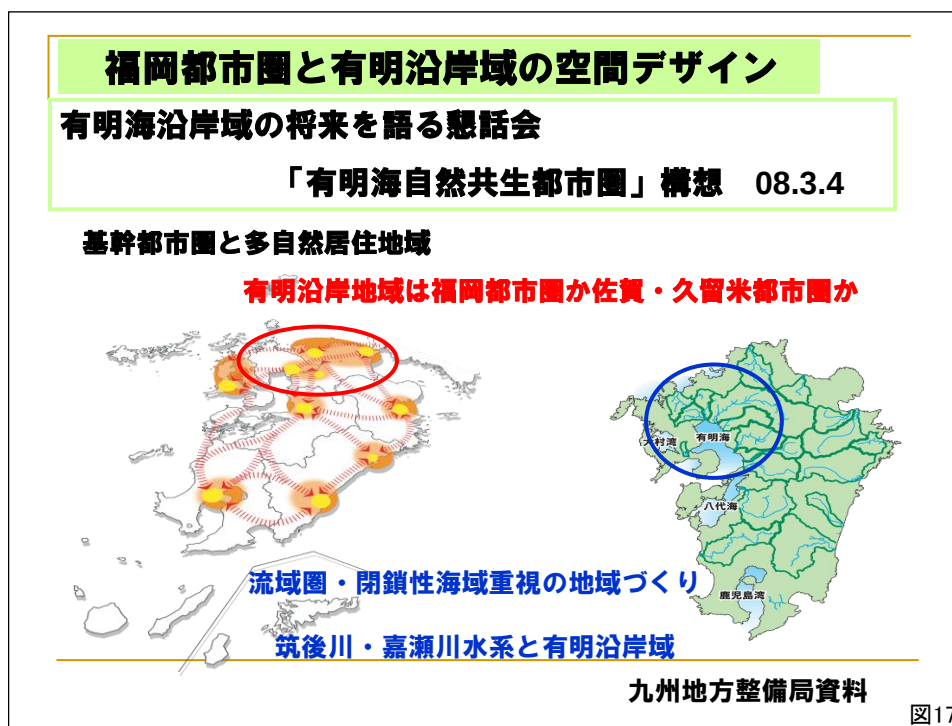
まず、この横割りでの管轄があります。いろいろ共同でやる時これが一致しない限りは難しい。そして、一致することは少ない。今度は縦割り。農林水産省、国土交通省、経済産業省、環境省、水資源機構が関係します。それぞれ有明海を対象にして政策があります。そして科学技術で本来役割を果たして大学をまとめて有明海の生態系と水循環の研究調査が必要です。それこそ歴史・文化をトータルにやるべき文部科学省は、まあいってみれば目立たない。個々の研究費はつけます。しかし、トータルを理解するというプロジェクトを出していない。

こういう縦割りと横割りの境目の中、有明海があります。事態は複雑なんです。ここでしっかり分析しトータルに管理する機構があって、それぞれ機関に指示しない限りはずっと裁判沙汰が続くんだらうと思います。何が正しいか。私も専門家ではありません。しかし、それぞれの利益を追求するのでは自然管理はできない。

九州全体の中におけるこの地域・場所（佐賀）をどう考えるか。

一つは有明海を抱えている。筑後川という最大の河川を抱えている。嘉瀬川という急流河川を抱えている。同時に経済的には、この赤（図 17）の福岡、福北という日本の4大都市圏といわれているところの圏域の中にある。通勤圏も観光も、そして農産物マーケットも依存している。日常的依存ですから、この赤い輪（図 17）の中でどう生きるかということです。

もう一つは、この青い輪（図 17）の中でどう生態系を維持するかという命題があります。



この二つの中で、つまり流域系、閉鎖性といった自然環境の話と、福岡都市圏という社会的影響との関係の中で、どう空間をデザインするか。社会的影響は日常的ですから福岡都市圏ベースの中で再編成されるでしょう。しかし、自然環境の方は、余程自分でマイペースでつukらない限りはさっきいった縦割り、横割りの境目の中で行き詰まっている。こちらのみなさんたちでつくった有明海自然共生都市圏（平成 18、19 年度佐賀県調査）という、これは文章としても発想としても非常にいいんですが、誰がどう主体的にやって、力と金を持っているところとどう組んでいくかという問題にぶつかります。ですから、できるだけ地域づくりは分権化しながら、なおかつ有明海のような問題はやっぱり九州全体でやらなくてはいけないというのが私の考えです。

最後のまとめですが、これは皆さんがつくった話ですね。地方分権の話で分権型の広域計画をなんとか頑張ってつくったんです。戦後初めての地方分権型国土計画になっているんです。地方の課題に精通した自治体が主導できるようになった。自治体というのは県と政令市ですから、もっと現場の自治体はそれほど関与していない。地元の経済団体、地元の有識者などです。

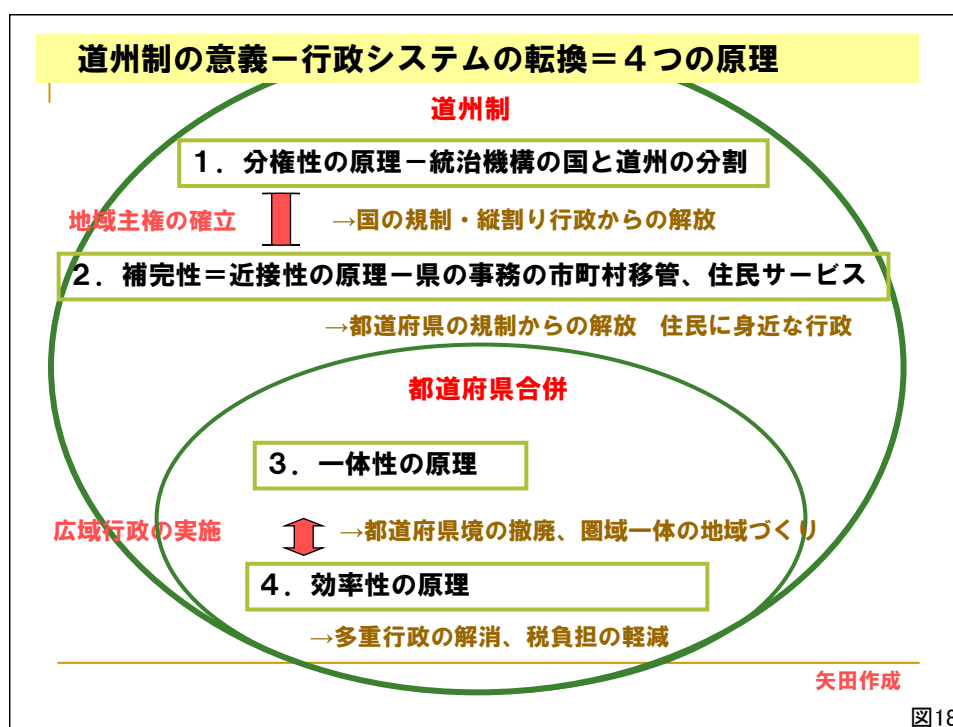
しかし、この計画策定の作業を一回やると、10年ごとですからどんどん地元のことをきちんとデザインする学者が、有識者が地元に着定していく。そのことが最もいいことなんです。これまでのように、全部、東京の大学の先生たちを中心につくられたのを変えることになり、中央有識者集権型から地元有識者主導型になっていくことになります。これは意義深いことです。

しかしそうはいいいながら、自治体間、国の支・分局のプロジェクト調整型で、最後決める人が、道州制の知事がいませんから、そして県知事は他県の文句はいえませんが、結果的には地方整備局が文章上の直しをやってしまう。ここで分権型の限界がでてまいります。

そして市町村や市民運動が策定に参画できない。これから3ヶ月ぐらい公開して意見はいえますが、意見をいう話とつくる時策定に参加する話ではまったく力が違いますから。

したがってこれから出てくる地域の風土・文化・課題のこういうものと、さっきせっかく分権型になったのが、どこでどうドッキングするのかなあというのが課題なんです。これからおそらく5年、10年が課題だと思っています。特に半島、離島、中・山間地、閉鎖水域、外洋性海域、これは九州特有のところなんで、これが九州全体の計画にどうかかわりますかというところが一つのポイントです。霞ヶ関計画から思い切って地元主導になって議論してきたつもりなんですけど、結果的にはまだまだうまくいっていないと感じています。

私は今、道州制に悩んでいるんですが、道州制と都道府県合併が同じと思っている学者が圧倒的に多いんです。縦割りと横割りを全部とっばらうのが道州制、横割りをとっばらうことだけやったら都道府県合併になるんです（図18）。



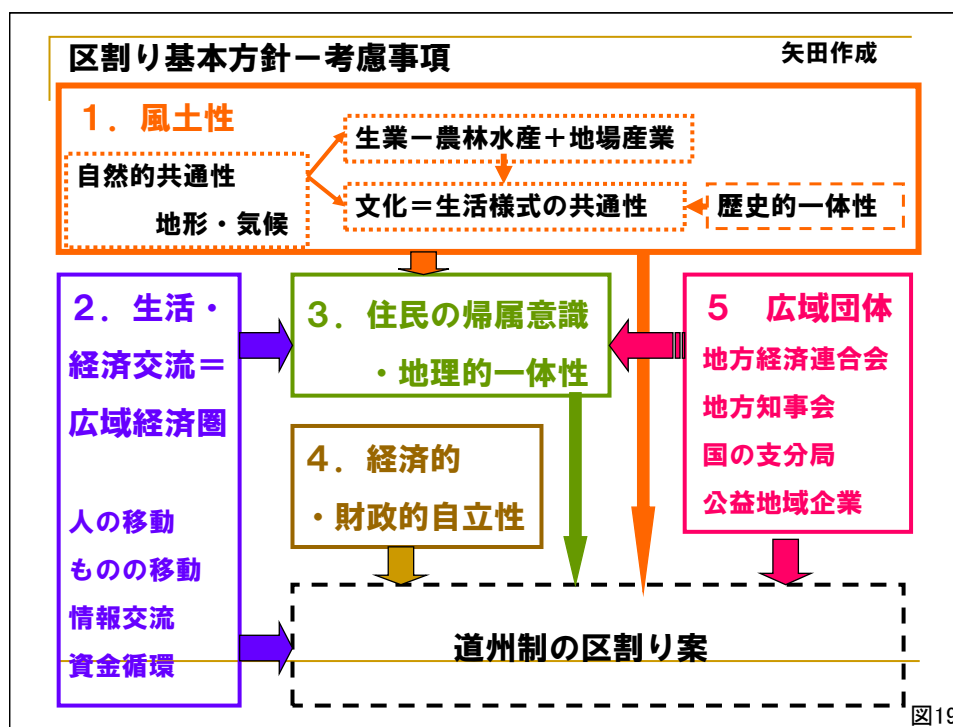
要するに国の統治機構をほとんど道州に移すという、いってみればドイツの連邦制にほぼ近い。今、イタリアがやっています。フランスも相当程度やっています。

国の内政担当部分を道州に移し、九州のことは九州で意思決定していく、したがって財源も確保してくる。そして、県がやっている権限をほとんど市町村に移してしまう。ここに今、提起している報告書のポイントがあります。まだまだ課題があって実現するとは思いませんが、今、経団連が出し、国のビジョン懇談会あり、それから知事会議が書いて、それから九州の戦略会議、4本の文章があるんですが、圧倒的な中身があるのは九州モデルだという評価を受けています。なぜなら県の行政マンが書いているんですから。それをまとめて出していますから。要するに行政感覚が非常に優れていますから説得力がある。しかし、まだまだ小さな市町村問題、政令都市と道州はどうなるかといった問題が残っています。

第一に州都をどこに置くのかと、いきなり喧嘩する人がいますけれども、私はほとんど興味ないんです。岡山と広島は州都論から入ったんで中国地方はまとまっていないんですけれども、あんな

のは最後の shoot で結構と、州都が一個である必要はないと思っています。

まあ、それはそうとして、今いった有明海問題を深めて縦割りと横割りの中で地域から問題提起しても受けとめる権力機構がないというところに大きな問題があります。



最後に一言。今、道州制ビジョン懇談会で道州制の区割りをやっています。本州の区割りをどうするか議論を委員会の中で来年3月までやります。人・モノ・情報はすぐに統計がでます。一億二千万人のうち、まず三千五百万人から四千万人の関東圏が出来上がります。北陸三百万人ぐらいが出来上がります。

これに行政区画を合わせるというのも一つなんですけど、もうすでにある地方の団体があって、これは非常に有力な意思決定機構です。これに合わせるという話も出てきます。いやそうじゃないと、住民の帰属意識、地理的一体性、風土性が大事だと必ず書いてあるんです。これは一体どうやってやるんだと（図19）。もし、入れたらですね。自然的共通性、生業の話から、文化の話が出てきます。東北文化と九州文化が違うのは誰でもわかりますが、一体本州をどう分けるのか。今、悩んでいます。今日の話は非常に楽しみです。今日の話から、ヒントをいただければと思っています。時間ですので、以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。

「空間に刻まれた歴史・暮らし・文化を語る」

コーディネーター

桑子敏雄氏(東京工業大学大学院教授)

みなさん、こんにちは。桑子でございます。今日のシンポジウムの後半部・パネルディスカッションのコーディネーターを仰せつかりました。

佐賀を含む北部九州全体の空間を考える。過去から現在、そして現在から未来へ。「空間」という言葉に注目していますが、今日の後半部はかなりの時間軸をもっていて、古代から中世、近世、現在も含めて将来を展望するという非常に壮大なスケールの話になるのではないかと考えております。多彩なパネリストの皆様に参加していただいておりますので、私自身も楽しみにしております。

さきほど司会の方にご紹介していただきました『日本文化の空間学』という本。この本が生まれました経緯です。以前、この会場を使い、「龍宮からの贈り物」というタイトルで、特に佐賀平野を有明海から見る、それも有明海の海底から見る、そういう見方で、参加したメンバーの研究発表を行いました。その研究成果をまとめたのが『日本文化の空間学』です。

『日本文化の空間学』というと非常に大きなタイトルですけれども、まさに佐賀平野から日本の文化と空間の問題をつなげて考えてみようという試みだったわけです。

読んでいただいた皆さんから面白い視点だという感想をいただきました。「空間学」という言葉も研究を進める中で熟成してきた言葉です。

空間ってなんだろうと考えてみますと、抽象的ですね。例えば、国土とか地域を見ようとするときに、いろいろな表現のしかたがある中で空間という視点から見てみようということです。

私は、もともと哲学を研究しておりまして、人間というのは身体（しんたい）をもった存在であると考えています。ものを考えるときもどこでもない抽象的な空間で考えているのではなく、まさに今ここで生きている場で考えている。誰もがそのように考えているはずなんです。

それをもっと根本的に突き詰めていって、例えば佐賀のことについて、或いは九州について考える。或いはもっと広く日本や地球全体のことについて考える時にも、常に自分自身が一人の人間として身体をもって、ある場所から考えているんだということを自覚しましょう、自覚して考えましょうということです。その時に、自分が置かれている環境全体がどういう見え方をしてくるのかを考えよう。こういう趣旨、考え方で空間学という言葉 皆さんとともに練り上げてきた、議論してきたつもりです。

はじめに、空間学という言葉は聞きなれない言葉だと思いますので、簡単にこんなものだというところをご紹介してみたい。この空間学的な観点から、佐賀の、いうなれば魅力、価値と言ってもいい、佐賀の空間、或いは北部九州全体の空間がどういう価値を持っているのだろうかを考えます。

この価値の中には、基調講演の矢田先生のお話にありましたように、経済的な観点からの価値もあるでしょう。ただ、空間学が目指すのは、もっと多様な価値ですね。

スライド（図 1）をご覧ください。簡単に定義しました。

空間学とは、国土や地域に蓄積された価値を明らかにするための方法であり、その価値を未来へ引き継ぐための実践活動である。

実践的な学問というイメージです。

空間学は次の要素からなっている。

まず、人間は一つの体を、自分自身の体をもって必ずどこかで何かを見ながら、そして、誰かと付き合いながら、誰かと議論しながらものを考えている。これをまず大事にしようということです。

身体（しんたい）も空間的な存在であるということですね。そのことをしっかり認識しながら、ものを考えましょうということです。

◇空間学とは何か

国土や地域に蓄積された価値を明らかにするための方法であり、その価値を未来へ引き継ぐための実践活動である。空間学は次の要素からなる。

- (1) 身体を空間のなかに置く
- (2) 感性と思考を総動員する
- (3) 多様な視線と視点の賑わいを実現する
（多様な分野の研究者、住民・市民、行政担当者等によるフィールドワークショップ）
- (4) 空間の価値構造を認識する
（「ふるさと見分け」を行う
 - ① 空間の構造認識
 - ② 空間の履歴認識
 - ③ 人々の関心・懸念認識）

図1

そのためには、単に頭で考えるだけではダメ。さきほど霞ヶ関のお役人の話がありましたけれども、私も時折霞ヶ関にいりますが、狭い部屋の中でお仕事をされてなかなか大変だなと思います。

ただ、国のことを考えると、やはり国土全体がどういう状況になっているかということを自分自身の目と足で考える。感性という言葉を使えば、人間の持っている五感をフルに働かせながら同時に考える。総動員するということですね。

とはいっても一人の人間が考えたり、感じたりするのは限界があります。特に人間は一人ひとり成長する過程で勉強したり、就職したり、役職についたりします。ですから、ものの見方というのはそれぞれの立場によってかなり限定されてしまうんですね。

さきほどの矢田先生の基調講演の中で縦割りという話がありました。ものの見方を限定する、語り方を限定する一番強固な制度ですね。それを取っ払いましょうということです。取っ払うにはどうすればいいかというと、そういう多様な視点を持っている人たちが多様な視点からものを見る。多様な視点から一緒に見て、感じて、考えて、それで議論しようと、そういうことです。

これを私は「多様な視線」と「視点の賑わい」と呼びます。賑やかに議論するということをいっているわけです。実際に行う活動を多様な分野の研究者、住民、市民、行政担当者等によるフィールドワークショップといっています。

フィールドワークというのは現場に行くことですね。でも現場に行ってみるだけではダメなんです。議論しながら、ここはどうみえる、ああみえると議論する。のちほど写真をお見せしますけれども、佐賀平野、とくに城原川流域に行ったときに、合田先生をはじめ、建築・土木関係者、その他の分野の先生たちと一緒にいったときに、なぜ、ここにこういうものがあるんだろう、どうしてここは堤防が凹んでいるんだろう、ここに小さな祠（ほこら）があるけどどうしてなんだろうという疑問が湧きます。これを議論する。

小さな社（やしろ）であっても、文化人類学や宗教学だけでは理解できない、存在の理由があるんですね。それを議論しながら明らかにしていく。これを私は「フィールドワークショップ」というふうに、「フィールドワーク」と「ワークショップ」を結合して呼んでいます。

何を議論するかというと、空間の価値構造を認識するというふうに私は整理しています。これを「ふるさと見分け」と呼んでいます。ふるさとを見分ける力をもつ。そのためには、まず、空間の構造を知る。地理的な地質的な、山と川と海、高さであるとか、水がどういうふうに流れて川をつくっているとか、或いはクリークがどうなっているとか、有明海がどうなっているとか、そういう地形的な構造を見る。おおまかな構造を見ることも大事ですけども、現場に立って微妙な、微地形といいますか、かすかな変化も読む。例えば佐賀平野の起伏の変化ですね。

私がこの県立美術館ホールに立つのは三回目ですが、最初にここに立ちましたのは、佐賀市内の水道（みずみち）を調査されているみなさんと一緒にシンポジウムに参加したときです。佐賀には水路がたくさんありますよね。この調査に参加させていただいて、地域をどういうふうにみるかというディスカッションがありました。その時にもこの段上に上げていただいたのです。

佐賀平野は、佐賀市内も非常にフラットに見えますけれども、雨が降れば水は高いところから低いところに流れる。それがどういうふうに流れていくのか。これが市内の水害対策とも非常に深く関係しているわけです。内水の問題です。

その水の道をどういうふうにつくるかということと、たぶん恵比寿さんの像の置き方とか関係しているんじゃないかなあぐらいは想像するわけです。でも、それが本当にそうなのかどうなのかというのはいろんな方たちと議論しながら理解していくということですね。

恵比寿さんの像もそうですけれども、昔から蓄積されてきた空間に、空間の意味づけがなされています。これが「空間の履歴」という言葉で表現するものですね。

過去から蓄積された歴史がある。歴史的なことも含みますが、履歴というのは、履歴書がそうであるように、過去からの積み重ねです。履歴書は現在に至るまでの経歴を書いて初めて履歴になるわけです。それは何のためかということ、就職するためであったり、学校に入るためであったり、つまり、蓄積されたものをいかしてこれから自分が何をやるのか、何ができるのかということを示そうとする。それが履歴書なわけです。ですから空間の履歴というのは、地域が持っている蓄積された様々な経緯、経緯だけでなくその経緯が将来の発展にどういう可能性を持っているか、そのところを示しているということですね。

そして、そこに暮らしている人々、或いは、そこを訪れる人々がその地域で何を見、何を感じるか、何を大事として見るかということですね。

私も城原川流域の脊振・神埼・千代田で、みなさんとワークショップを行いました。なぜ、そこにこういう神様がいらっしゃるのか。櫛田宮ではなぜ須佐之男命（すさのおのみこと）が祀られているのか。櫛稲田姫（くしなだひめ）が祀られているのか。そのことを聞いてもスッと答えられる方はなかなかいらっしゃいませんよね。地域に住んでいる人にも、蓄積された履歴の意味がわからないということがあるわけです。その方々にとって無関心だった、関心がなかった、いわれてみて初めて気がついたということがしばしばあるわけです。

そういうことも含めてそこに生きる人々が、関心、懸念、心配事も含めてなにをもっているのか。それを把握することがとても大事です。これを頭に置きながら地域に出かけて皆さんとディスカッションすると、かなりいろんなことがわかってきます。

これ（写 1）は城原川を歩いた時の写真です。

この日は、私が初めて柳川にまいりました時に歓迎してくださった柳川の広松伝さん（柳川の掘割再生の中心人物）のお宅にお線香をたてに行って、その日の午後、柳川から城原川にまいりまして堤を歩いた時の写真です。私にとって思い出深い写真です。

どうして堤防がへこんでいるのかとか、どうしてここがこういうふうに曲がっているのか、どうしてあの水路は曲がっているのか、どうして向こうが山で佐賀平野はフラットになっているのか、

いろんな疑問がわいてきます。これをいろいろ議論したということです。

ここ（写真2）も野越しがあって、水害の防備林がありまして、それから石堰があります。

その脇にこういう祠（ほくら、写真3）がありますね。「これは何ですか」と地域の方に聞きましたら、「これ龍宮です」といわれたんです。なぜ、こんな城原川の中流域に龍宮があるのか。



この地図（図2）を見ますと、これは武雄河川事務所がつくった立体模型ですけども、色がついていまして脊振山中が黄色と茶色になっています。これを見た時に、これは龍の形に見えるというふうに思ったんですね。

脊振山の頂上がちょうど脊椎の背骨の突起のところですね。脊振村の脊、脊振山の脊というのは背中の背ではなくて脊椎の脊ですね。ですから龍の背骨が突き出たところが脊振山頂で、全体黄色いところが龍が空を飛んでいるように見えるなとこんなふうに思ったわけです。



脊振山の頂上にいきますと、これ（写4）は脊振山の頂上ですが、大弁財天という弁天様があるわけです。駐車場になっているところに昔は池があって龍が住んでいたといわれています。その向こうには自衛隊のレーダーがあって、ここが大陸との関係で非常に重要なポイントであることがわかります。神功皇后が三韓征伐に向かう時に、脊振山頂で朝鮮半島を見たというような伝説が残っていますね。

これ（写5）は、脊振の山に突き出している花崗岩の巨石ですね。背骨の脊椎みたいに見えませんか。

兼神社（かねじんじゃ、写6）というのがあります。花崗岩地帯ですからひょっとしたら砂鉄が取れたのではないかと。兼大明神（かねだいみょうじん）ですね。ここは日本武尊が祀られています。

踏鞴橋（たたらばし、写7）という、踏鞴製鉄の踏鞴（たたら）ですね。ここは白木川（しらきがわ）、新羅（しらぎ）の川ですね。



（写8）

城原川溪谷（写8）です。ここにダムが計画されていますけれども、この花崗岩の意味を考えると、伝統的な治水では水制工という水の勢いを止めるための施設ですね。自然の水制になっている。つまりドッと下る流れのエネルギーを抑制する。そういう働きをしている。このそばに住んでいる方の話によると、雨が降ると巨石がゴロゴロ鳴る。これは要するにドッと川の流れがいくのを抑えている。そういう働きをしている。

仁比山神社（にいやまじんじゃ）にも面白い話がたくさんあります。



写9



写10



写11



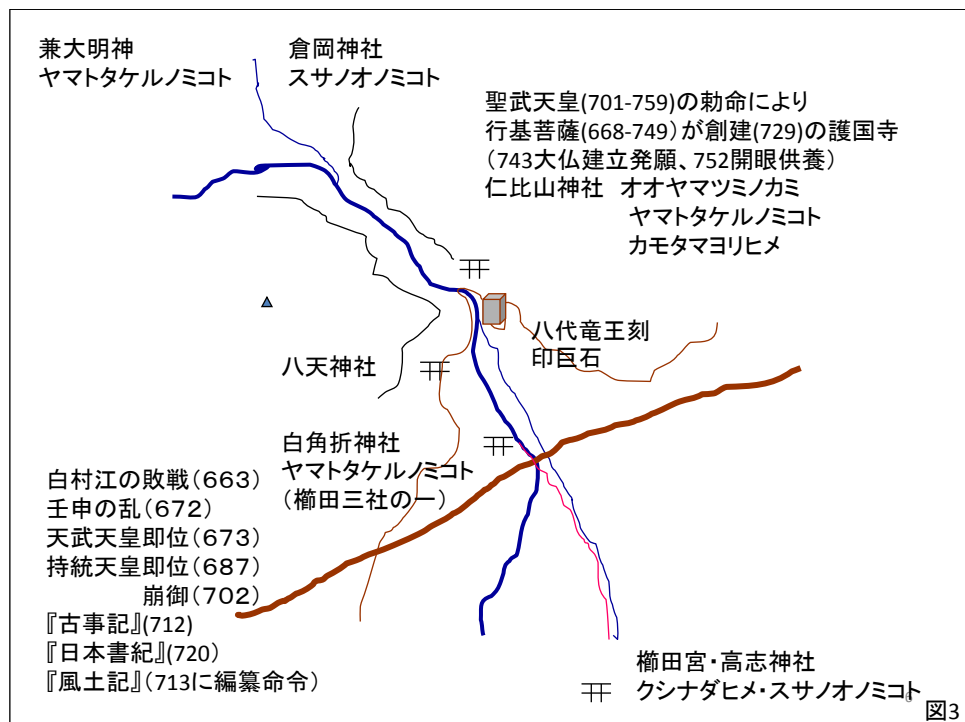
写12

正面の巨石（写 9）には、八大龍王（はちだいりゅうおう、写 10）という文字が刻んであります。これは、要するに大洪水が起きた時にここに水がぶつかる。龍の王様の力でもって水の勢いを止める。こういう仕組みになっているわけです。

これ（写 11）が白角折神社（おしとりじんじゃ）で城原川から馬場川（ばばがわ）に分水する分水の大事な社（やしろ）になっています。

私が大事だと思っていますのは、特に水城（みずき）、福岡の方にありますね。国土政策の中で大転換点がいくつもありますが、日本は白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に負けました。その中で様々な国土政策が打ち出されますけれども、大和朝廷の政策が濃厚に反映されているのがこの地域だというふうに思っています。

これ（写 12）は成富兵庫（なりどみひょうご）の治水で有名な城原川の三千石堰（さんぜんごくぜき）ですね。



こういうふうにこの地域は長い歴史の中で、水の管理、或いは水をめぐる文化というものに非常に素晴らしい資産といえますか、そういうものを蓄積している。

ただ、それがみなさんに共有されているかということ必ずしもそうではない。そういうことをしっかり掘り起こすということがとても大事なのではないかなと思っています。そういうことを意識的に考えようというのが空間学の方法です。

私の話は終わりにしまして、これからパネリストのみなさんにそれぞれのお立場から佐賀の魅力を語っていただいて、そこに蓄積されている宝物を掘り起こし、みなさんと共有しよう、こういう試みであると思っています。

ということでお並びになっている順番にお話を伺って、パネリストのみなさんが佐賀の空間の魅力をこういうふうに見ているということを皆さんにご紹介していただきたいと思います。

まずは、村岡央麻会長からお願いいたします。

パネリスト

村岡央麻氏(佐賀県徐福会会長)

村岡でございます。現在、佐賀県徐福会会長、恵比須DEネットワーク委員会の代表などを務めさせていただいております。

「なぜ、あなたは福岡県生まれなのに、徐福に関心を持ったの？」と質問を受けることがあります。

桑子先生のお話を聞きながら、疑問をもって、そして追求しようという気持ち、これが本当に大切だと思いました。

金立神社（きんりゅうじんじゃ）という佐賀市の北の方にある神社を月に一度必ず通っております。



（金立神社上宮、提供：佐賀県徐福会、写 13）



（徐福像・金立公園内、写 14）

そこにある石碑には、「孝霊天皇（こうれいてんのう）の御代に秦の始皇帝の命令を受けた三番目の王子の徐福王子が父君のために不老不死の薬を求めてこの地にやってきた」と書いてありました。孝霊天皇の御代というと、神武天皇（じんむてんのう）から考えると 2500～2600 年も前の話になります。その頃に秦の始皇帝の命令で徐福がここに来られたとするならば、凄い文化が有明海から上陸してきたのでは…と思いました。もう30年も前の話ですが、その頃、卑弥呼の話が大変持ち上がっておりましたので、それならば、佐賀は絶対卑弥呼の里であるだろうと思い、徐福を調べ出しました。

各地に残るたくさんの民話を聞くと、徐福さんにこういことをしていただいたなど、皆さんが「徐福」と呼び捨てにしないで、「徐福さん」と崇めていらっしゃる。民話が2200年もの間ずっと続いてきたのですね。

金立神社には、50年に一度の徐福の大きなお祭りがあります。このお祭りは、戦時中も続けられ、昭和55年に2600年祭が行われています。

金立山の上に登ってみますと、非常に大きな平野が有明海の前に広がっています。いわゆる筑紫平野の中央部の佐賀平野です。北には背振山系があります。

— 北に山があり、南に平野が広がり、東に川があって、西に森がある — 中国では、風水説から、これら4つの大変立派な地形を選んでお城を造ったそうです。韓国でもそれを城造りの条件としたと聞くと、それこそ佐賀平野はその地形にピッタリのところだといえます。

史記には、「徐福は、不老不死の薬を求めて3000人の童男・童女と五穀の種子、そして百工（ひ

やっこう、多くの技術者）を伴って東の蓬莱（ほうらい）へ向けて出発した」と記されておりますが、調べていくうちに、まさか始皇帝ほどの方が自分の健康や長寿だけを祈ってそのようなことをさせたのだろうか？3000人の童男・童女は10年も経つと、やがては成人になります。彼らとともに国づくりを考えられたのではなかろうか？だから、肥沃な平野、より住みやすい場所を求めて、佐賀平野に上陸したのではなかろうか？などいろいろと想像いたしました。これを誰もNOとは言えません。2200年も前の話は誰も知りませんから、自分でいいように考えることができます。とても楽しくて、だんだんと徐福研究に夢中になっていきました。



（佐賀・徐福国際シンポジウム、提供:佐賀県徐福会、写15）

それは、いつしか私のライフワークの一部になっております。先程ご紹介いただきましたように、昨年10月、この県立美術館ホールで「佐賀・徐福国際シンポジウム」（写15）を開催いたしました。

日本・中国・韓国・台湾の方々にご出席いただき、大変熱心に徐福さんをお話いただきました。例えば、中国の方は、「徐福さんは中国を出航し、行った先はたぶん日本であるだろう。そこで、いったい何をしたのだろうか」、また、台湾の方からは、台湾には、「徐（じょ）」という性の人が10万人くらいいて、徐という方ばかりを統括した組織があり、その方々は、「自分たちは徐福の一族で、私たちの先祖はこのような事をしてきたのだ」ということをお話しされました。徐福伝説は、佐賀地方だけのものと考えていらっしゃる方も多いと思いますが、日本国内30数ヶ所にいろいろな話が残っています。

地域の中に何があり、どのような歴史が潜んでいるか、なかなかわかりませんが、神社などから紐解いていけるものでございます。どこでもそうかもしれませんが、意外と地元のことには無関心で、県外の方々が佐賀平野と有明海をご覧になった時、素晴らしいものがあると直感される。そこに、私は、何か日本の国の歴史の原点がこの佐賀に潜んでいるような気がしてなりません。

徐福さんの話をし始めますと、10分ぐらいではお話しできませんから、もういたしません、脊振山系の南に面したところには、以前より掘ると必ず何かが発掘されます。鏡が出た、土器が出た、凄いものがある。しかし、それらが出土されても、新聞の片隅に小さく書かれてほとんど関心を引かない。佐賀市大和町惣座辺りの遺跡や高速道路付近の発掘時に、あちこちからいろいろなものが出てきました。現実には、そうであるのに、それがなぜだろう、佐賀方面にこんなに出没しているのに、専門家である日本の考古学者がなぜここに関心を持たないのだろうと思わずにはいられません。

桑子先生がおっしゃいましたように、治水ですね。人が住むためには、住みやすいまちづくりをしなければならないと思いますが、その治水も本当に感心するほどに整えられていて、その中でこの佐賀が、佐賀平野が豊かに守られている。これこそ日本の中の宝でなくて何だろうかと思っております。

それから先程、恵比須さんのお話がありました。

佐賀の街には、四百数十体の恵比須さんが家の角に鎮座しておられます。現在、恵比須さんの戸籍台帳をつくっておりますが、台帳に記されたのは、424 体でございます。

鬼門には、裏鬼門、表鬼門がございます。西南が裏鬼門、北東が表鬼門。その鬼門封じに恵比須さんがおられます。普通、恵比須さんは、漁師や海の神様、海の信仰として漁師町などに多いといわれています。そのような恵比須さんが、なぜ佐賀にこんなにおられるのでしょうか？それも長崎街道沿いに。佐賀の恵比須さんは、どのような意味をもっているのか？ 歴史的には浅くて 300 年ぐらい前が一番古いようですが、漁師の大漁の信仰だけではなく、長崎街道沿いでは、旅の安全なども祈られたと思われます。

大福帳恵比須（写 17）、踊り恵比須（写 18）、ソロバン恵比須（写 19）など、恵比須さんそれぞれの表情が違い、商売の方は繁盛するように大福帳を広げ、勝手に自分の思うような恵比須さんをつくっていらっしゃる。これもまた郷土信仰の中の一つだろうと考えられます。



兵庫の西宮神社にお参りした時にお聞きしましたら、「恵比須さんも徐福さんも同じですよ。お二人とも、海から、西の方から、宝を持ってやってきた人です。だから同じように考えてもいいのではないのでしょうか」とおっしゃった時には、私は胸がドキドキするほど嬉しくなりました。

素晴らしい歴史が周りにゴロゴロ転がっているのに気づかない。その歴史は、「日本人の心のふるさと」だと思います。本当に私は佐賀に住んでいて良かったと思っております。

桑子敏雄氏

お話を伺っていると、やっぱり地形をどう見るか。北の脊振と平らな佐賀平野、そして筑後川があって、佐賀平野がある。まさに風水ですね。風水から見れば本当に理想郷として考えられるような地形。地形そのものが一つの宝物である。

そこにおっしゃるところでは西から宝物を持ってきてくださった方たちがいる。大陸から、或いは海からかもしれませんが、その両面から捉えることが大事なと聞きながら考えました。

ありがとうございました。続いて合田博子先生お願いいたします。

合田博子氏(兵庫県立大学教授)

さきほどお話がありました桑子先生が編集した本『日本文化の空間学』の中に二つ書いておりまして、時間の関係もあるのでその抜粋という形でお話をしようと思っています。

特に「水の技術」と「水の儀礼」にポイントをしばってみました。

空間の中でも特に水の空間というところに焦点を当てましたが、それが伝えている技術、実は技術も文化なんですね。そういうことと、それからもう一つ空間の履歴関連ですけれども、それが現在にどういうことを伝えているかということを中心にお話しようと思います。

私は兵庫県から参りました。環境人間学部というちょっと珍しい学部にありますが、私のもともとの専門は主に東南アジアの文化の研究をやってきました文化人類学者です。

日本のことも当然やっておりまして、文化人類学といいますけれども、柳田國男さんの民俗学とほとんど同じで両方の学会に入っております。しかし、この環境人間学部という所に籍を置いている関係から、ただ単に人間の文化ということをやっているだけではなく、それが、技術も文化であるというところから環境をどういうふうに保全していくか、今までどういう風に環境と人間が対応してきたかということに関連づける。私にとっては、環境民俗学なり、環境人類学という分野に、ここ10年ほどポイントを絞ってきましたので、そういう立場でお話をしたいと思います。

水・土の人(地元)、風の人(旅人)

- 脊振山から城原川をへて筑後川にいたり、
- 国見の山から南と北の有明海と玄界灘を遠望し、
- 山・川・水路の「空間の履歴」のなかに、
- 江戸期の成富兵庫らの河川土木技術の伝統
- 干満の激しい有明海ならではの
筑後川流域の〈アオ〉などの取水の工夫、
- クリークでの暮らしぶりを目のあたりに

図4

ここ(図4)に書いてあることは、ほとんど桑子先生のお話になったことと同じですが、ここで、水・土、水土(すいど)と風の人というところにポイントをあてて、ちょっとお話ししたいと思います。

水・土の人というのは、風土という言葉はありますが、水土という言葉はなかなか聞かれないと思います。日本の稲作文化から考えてみると、風と土というのは要するに地理学のほうからきた言葉だと思うけれども、つまり天候と土地ですね。しかし、天候も大事だけれど、農業生産にとっては水がとくに大事なわけで、水土という言葉はなじみが無かったかもしれないが、稲作文化の生活を考えるには重要な言葉ではないかと、最近は民俗学のほうからもいわれています。

それを二つに区切って水と土の人というのは、地元の方、みなさんのこと。それから風の人というのは、これは風土のほうの風ではなくて、風の又三郎とか、風来坊とか、要するに旅人、私みたいな人間のことですね。

たまたま、私は関西から、桑子先生は東京からいらっしゃいましたけれども、さっきの霞ヶ関の話ではなくて、よそからやってくるけれども、何か一律のものさしをもってそれを押し付けようと思って来たわけではなく、まったくの風来坊なんですね。観光であるかもしれないし、ふと自分の研究の合間に立ち寄ったという。土地のみなさんにとっては、何の役にもたたない単なる風来坊かもしれない。そういう者が見知らぬ土地に来て何も知らないところで、「これはなんでこうなのですか？」という驚きと発見をもって、何かを聞く。地元のみなさんにとっては、とても大事なものであったり、逆に困っているものであったりしても、日常の当たり前のことなので、あきらめたり、或いは気がつかなかったりする。それを、非常に素朴な子どもみたいな目で発見して、風の人が「これは何ですか？」と聞く。すると、土と水の人の方たちが、「アッこんないいもの自分たち持っていたんだ」とか、「我々困っていたけど困っていることに気がつかなかったな」とか、そういう形でお互いが触発できればいいのかなと思っています。

空間に刻まれた 暮らしと文化

日々の暮らしの生活習慣や、

時には危機管理の方策として

- ・ 八大龍王・弁天・豊比売・天神などの
水神・雷神を祀る神社やお堂
- ・ 川端や堤防の石碑や祠

これらのモノが空間におかれていて、過去から
現在につながっているこの場の人の暮らしと
文化が見える

図5

これ(図5)もさきほど桑子先生に写真で見せていただいたのを繰り返していることになります。

大事なのは一番下のところで、これらのいろんなモノがあります。八大龍王とか実際に出てきました。これらのモノが空間にあって、過去から現在につながっている。この場の人の暮らしと結びついていて、そこからこの場の暮らしと文化が見えるということが重要だと思います。

そこでさっきお話がありましたが、ここにご縁があって来るようになってから4~5年経ちますけれども、一番ショッキングというか感動的な出会いというのが二つありました。

一つが「風浪宮(ふうろうぐう)」という福岡県大川市ですけれども、少童(海童・和多津美、わたつみ)、海の神様の神社です。その「沖詣り海神祭」に行かせていただきました。2006年4月28日のことです。旧暦卯月一日に毎年行われる祭りで、海の幸の解禁のお祭りです。

年に一度大潮で現れた海底に降り立ち、船で行くわけですが、潮が引いてくると、まさに「船が座った」と乗り合わせた地元の方が言われて、エッと思いました。階段を船頭さんが胴長という胸元ぐらいまである長靴が重なったようなものを着て、まだ少し水がありますので梯子をかけていただき、我々は普通の長靴を履いて海底に降りました。

その場で神事が行われます。そこで神に祈った後で、潮干狩りになります。海底の潮干狩りというのを初めて体験したわけですが、その海の宝をいただいて陸に帰ってくるという経験をしました。

一生で初めてぐらいの、大変ビックリする体験でした。

まさに龍宮城の浦島太郎体験をしたというのが我々の本当に共通の感想だったのです。そこから龍宮体験のような視点を持つことができた。海底から背振の山を見るという体験をしたわけです。

風浪宮の少童（わたつみ）の神話というのは、みなさまもご存知の海幸彦と山幸彦の神話に關係して、海の幸と山の幸を交換する。技術も交換してみたけれど、釣り針を魚に捕られてしまって困った山幸彦が龍宮に行く。そこで豊玉姫（とよたまひめ）というお姫様と出会い、結婚するわけです。そしてお父さんである龍神から海と川の水を制御する潮満珠（しおみつたま）と潮干珠（しおひるたま）というのを授かった体験のお話です。ここのところが、水の技術という今回の話題に關係してまいります。



（撮影：桑子敏雄氏、写 20）

これは桑子先生が撮られた写真（写 20）です。あまりにも素晴らしい光景でしたので私も撮りましたが、桑子先生の写真を引用させていただきました。

この写真（写 20）は風浪宮の祭の時に、一端海底に降りて儀礼をして、それが終わって潮干狩りもして、またどんどん潮が満ちてきて船に乗ってみんなで帰っていくところです。中央付近にある笹のところ、あれが神籬（ひもろぎ、神道において神社や神棚以外の場所において祭を行う場合、臨時に神を迎えるための依り代となるもの）です。それがもう崩れて海の中に沈んでいくところですね。

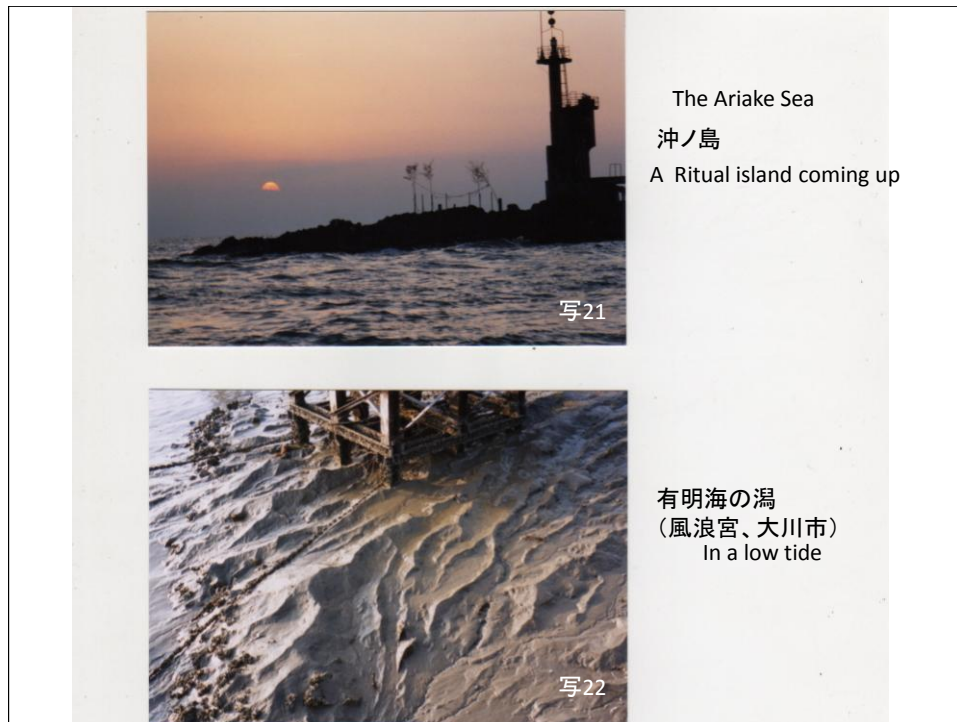
この経験をしましたら、もう一回そういう似た経験ができますよということをお聞きしまして、もう一度、7月14日、これは旧暦6月19日、今度は佐賀県の側に来てくださいということで、同じ有明海ですが、「沖ノ島参り」という祭りを訪ねさせていただきました。

やっぱり我々にとって最も大切な始めの第一歩というのは、現場としての地元があって、そこに、風の人であっても、現場に行ってみて感じ、考える姿勢ということで、「さあ7月も行こう」ということでまいりました。

ここはまた性格が少し違って、御髪大明神（おかみだいみょうじん）という他ではあまり聞いたことがない女神様、この神様に雨乞いをする。雨が降らない時は農民にとって雨乞いは大事なわけですね。また、お島さんという人があるとき有明海に身を投げて雨乞いしたという伝説があって、その舞台である沖の島が、大潮の日に現れるというのです。

そこで出会ったのは、浮立（ふりゅう）という、船で太鼓を叩いて、みなで自分の太鼓打ちがいかにか上手かということ船ごとに競合する祭りでした。セッションというとジャズみたいですが、そんな風に大変現代的に感じました。われわれは観光客みたいに、夜半から夜明けまで船で見せて

いただいて大変驚きました。外から来る風の人というのはそういう発見に驚いて、結局みなさんが何か困っていることがあったり、これを活かしたいと思うことがあったら、外からの人間だけど応援団になりたいなあとなって、佐賀大好きになりました。



これ（写 21）は非常に美しい写真だと我ながら思っていますが、沖ノ島が出てきたところですね。普段は、右側に見える灯台しかないわけです。そこに島が出てきて、やはりあそこに神籬という笹を立てたものがあります。ちょうど日の出ですね。太陽が上がってくるところです。ちょっと見えにくいですが、神籬の付近にポツポツとあるのが石の碑ですね。これが御髪大明神やお島さんの碑です。

この渦の写真（写 22）は沖ノ島ではなくて、さきほどの風浪宮の祭の時に撮った写真ですけど、干潮時の様子です。

こういうところで、歴史を過去のものとしてただ回顧するのではなくて、過去の神話のメッセージに耳を傾ける。神話は歴史以前の過去を語っているかもしれないが、その歴史・伝承を過去に完結させずに、現代に生かしてくることが大事だと。

それから神様の系譜というのは単なる神話とか物語ではなくて、結局、神様というのはご先祖様だと、我々考えたらいいだろう。ご先祖から子孫への伝承、それから神様を祀ってきた人々の集団がどういうふうに関係しあってきたか。縦と横の人間の集団の関係を神話は語っているのだろう。それがお祭りなんかの時に目に見えてくるわけです。

だから過去が現在につながるお祭り、実は儀礼というのは非常に重要な場であるわけです。このような人間関係のネットワークを「社会関係資本」と、ちょっと難しい言葉ですが、社会学や文化人類学ではそのようにっております。

いわゆる建物とか道路とか矢田先生のお話にあったような、あれは社会資本ですよ。

でも人間関係の人脈の大切さ、それが意味で社会関係資本であると。英語ではどちらもソーシャル・キャピタルといいます。英語では同じ言葉ですが、一応日本語ではふたつに分けて訳しております。

これ（図 6）はですね、小さな字で書いてあるような伝統的な神社やお寺を中心とした集団が過去にあったのですが、今、大事な集団というのは、このようにいろいろあります。これらがまさに

社会関係資本にあたるわけです。

この地域社会の住民の総意をまとめる知恵を出し合い、リーダーを育成し、本当に地域の具体的な生活環境に即した様々な技術が伝達されてきました。今までは。

これが肝心な話なのですが、そのような技術が途絶えようとしているところが全国に沢山あります。それをとめるには、人間集団が、人々がただいればいいのではなく、継承が可能となるように、次の世代にきちんと受け渡していく仕組みを工夫することが大事です。

地域の網の目を結ぶ近隣集団は

地域の集団の伝統ネットワーク＝村の文化を支えた氏子、檀家、講など、また生産手段の森や川・海を共同利用する流域の近隣集団

いま

- 町内会、学校、PTA、子供会、老人会、青年団など
- 職場や同業組合、農協、商工会議所はもとより、近年のNGO・NPO集団も、行政も
- 地域社会の住民総意をまとめる知恵とリーダーの育成、地域の生活環境に即したさまざまな技術の伝達には、人間集団の存続が必要

図6

あまり時間がないですが、技術と文化の関係について二つの例（図7）を申し上げます。

城原川の神水採りまつり 花宗川のお汐井採り

- どちらも「アオ」の取れる潮水と真水の共存する場所に聖なる水を取りに行く。
- 水の儀礼過程をつぶさに追う
⇒ 水の技術、水管理の知恵
- 空間の大切さ、空間と切りはなした遺跡保存？

図7

一つは神埼で行われていたのですが、神水（シェー）採り祭りというのがありまして、城原川流域の嘉納地区というところで聞いた事例です。

毎年9月12日、潮の満ちる時期に鉾につけた天狗の面を先頭にして男の人たちが行列して川の

ほとりまで行き、天狗の面に水をかける。ただそれだけのお祭りです。

これの特徴は9月12日という日です。潮が川のかなり中流にまで上ってくる時期にあたる。だから12日まつりともいう。この嘉納地区にある神社ですけれども、昔は天満宮という天神様を祀っていた神社です。今は普通の天照大神の神社になっています。それに加えて猿田彦（さるたひこ）を祀っています。この猿田彦の神様というのはなかなかわかりにくい神様です。また、実は天神様というのは菅原道真が有名ですが、菅原道真以前にも天神様がある。菅原道真以前の天神様というのが私は水関係では重要だと思っています。それは水の神様だったり雷の神様だったりする。猿田彦というのは、山王日吉神社という神と仏の信仰が混じったところで、山の神のお使いの猿と結びつくといわれたり、天狗と結びついたりしてきました。天狗というのは山岳修験道の修験者も意味します。そのような複雑な関係があります。

猿田彦は、神話の中では瓊（ちまた）の神といって、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が天孫として天から降りてきた時に道案内をした神です。今は山王日吉神社では大山咋（おおやまくい）の神様を祀っていて、猿田彦は伊勢の天照大神との関係で語られることが多いです。しかし、山王日吉信仰は山の神信仰として、天台系の山岳仏教と神社の神仏習合として両方混じっているのが本来のかたちでした。山岳修験道では、中世以降は本山派という天台系修験の一派が引き継いでいます。明治の神仏分離政策でもっとも打撃を蒙ったのは、このように神とも仏とも分かち難いまま、山岳修験道に伝わってきた日本人の素朴な自然信仰でした。

城原川の特徴の一つ、さきほど桑子先生のお話にもありましたアオ取水。城原川の下流でアオ取水という特殊な灌漑、水の取り方をしているところが、実は水の技術という話です。これと水陸両用の神としての猿田彦が関係するのではないかということに気がついたのです。

ここのアオというのはたぶんみなさんご存知だと思いますけれども、6メートルもある干満の差の中で、海水がいっぱい溢れて川の水位が上がったときに、底に近い下に海水がいて、上に比重の軽い淡水がくる。その淡水を上手に水門を操作して取って、田の水にも引いたという技術がアオ取水で、その真水がアオですね。

この水はおいしいし腐りにくい。そして佐賀はお茶の産地でもあります、おいしいお茶を入れたり、おいしいうどんを作ったりしていたということです。

それからもう一つ、お汐井（しおい）採りというのが大川市にありまして、さきほどの風浪宮の祭りに先だっておこなわれます。花宗川という筑後川の支流のほとんど水路のような川ですけれども、そこにもやはりアオが残っていました。

要するに、海の神様や河童や猿田彦などの祭や儀礼が、アオの淡水と海水の混じるところの技術と関係していることを、人々に伝えているのではないかという発見があり、それについて報告しました。

桑子敏雄氏

ありがとうございました。

合田先生は話したいことがあり過ぎて、時間がいくらあっても足りないという感じですね。

また、別の機会を設けてもっと詳しいお話を聞きたいですね。

それでは、続きまして多良正裕塾長にお話をお伺いしたいと思います。

お願いいたします。

多良正裕氏(地域おこしグループさざんか塾塾長)

私のテーマは、平安から鎌倉期です。

これまで桑子先生や村岡先生、合田先生から、神様や徐福さん、弥生時代などの話が出てきましたが、私は少し重複するところがありますけれども、神埼の荘(しょう)と脊振山、栄西に関連することをお話しさせていただきます。

脊振山は山岳宗教の地です。桑子先生から脊振山のという名は龍の背からきたというお話がありましたので少し補足させていただきます。龍の背という説もありますが、地元には、もう一つ、脊振山は天から茶が降るくらい茶に適した場所。茶降山(さふりやま)をもじって脊振となったという説があります。私は、脊振山はお茶の発祥の地ということに力をいれた活動もしていますので、茶降山(さふりやま)をもじって脊振となったという説のほうも簡単にご紹介させていただきます。

それではスライドをご覧ください。



これ(図8)はさきほどからお話に出ています場所を上空から眺めたものです。上のほうが博多、下のほうが有明海、その中間に脊振山、その南斜面のところに神埼があります。

1900年ほど前に景行天皇(けいこうてんのう)がこの地を訪れて荒ぶる神を治められた、それからこの地は神の幸が得られる地域だということで神幸の郡。そして現在の神埼となったといわれています。神埼という地名にはこういう歴史的な意味があるんですね。

少しそれましたが、平安時代、九州の中心的な場所は太宰府でした。太宰府が中心で、政治をはじめ、いろいろなものが回っていた。そういった中で神埼の地というのはどのようなことに関わってきたのか考えてみました。

当時の状況を簡単にご説明いたします。

まず、博多というのは太宰府の港、貿易の窓口でした。遣隋使、遣唐使、そういったものとか中国・宋の商船が出入りするところ、そして九州の特産物を中央に持っていく積出港でした。

有明海側はどうだったか。貿易も当然行われていました。そして、外国からの攻めに対しての守りは、博多だけでなく有明海側も同様に行われました。やはり地元の人たちとしては、有明海からも攻めて来るのではないかと心配のなかでその構えもする。久留米の高良大社に防壁を造り、

日の隈や神埼の山裾のところにも同じような備えをするなど、そういったものが残っているわけですね。

ここ（図 8）に神埼の荘がございますけれども、836 年、平安時代になって天皇勅旨の田の開墾が始まります。天皇の財を蓄えるため全国に 19 の荘園開発が命じられました。九州ではこの神埼の場所だけが天皇勅旨の田の指定を受けて国家事業として取り組まれました。面積的には全国で 3 番目に広く 690 ヘクタールあったといわれています。

この地がどうして選ばれたのか。今考えてみると、吉野ヶ里に大環濠集落があった。それは何かがあったから吉野ヶ里に大環濠集落ができたはずです。稲が作りやすかったとか、山に近い、海に近い、海や山の幸を求めてとか、非常に生活しやすい神幸の国であったのだらうと推測できます。それから考えると、九州でただ一カ所、太宰府にも近く管理のしやすい神埼の荘が発展をしていくことになるのです。

普通であればこの荘園の歴史だけで終わりますけれども、歴史のなかで平安といいますと、平清盛をはじめ、平家一族が栄えていました。そして、この神埼の荘に目をつけたのが平清盛の父である平忠盛です。忠盛は、鳥羽上皇、白河天皇が崩御されて鳥羽上皇が院政を敷きますが、その時に一番頼りにされたのが平忠盛でした。鳥羽上皇は全国の荘園の管理をはじめ、武力、財力、政治力などほとんどを忠盛に頼るようになったといわれています。

そうなってくると事実上全国の荘園が平家の管轄になってきますし、特にその中でも目をつけられたのが神埼の荘なのです。当時は太宰府が外国、中国や朝鮮半島との貿易の窓口でした。貿易で上がる収益のほうが稲作などの収益よりもはるかに多かったんです。利益率が高いというところに目をつけるわけですね。

そこでどうしたかという、この神埼の荘の積出港である博多に目をつける。博多には神埼の荘の倉庫があって、天皇のもとに送る中継地となっていました。そこに目をつけて影響下におくために博多に櫛田宮を分社します。櫛田宮の分社を行うことで、神埼の荘の一部を博多の港に置いたのと同じようなことになり、そこを拠点に堂々と博多の港を通し宋との貿易を始めるわけです。それ以前は、有明海を通して宋の船を独自で受け入れていました。表むきの貿易は博多港から行うけれども、裏貿易港として有明海側に着目していたんです。佐賀市蓮池の辺りに港があったといわれ、発掘すると宋銭とか、焼き物の破片とかが出土しています。神埼の荘でも、有明海を通じて貿易がなされていたことを思わせるものが出土しています。

忠盛はこのような裏貿易を通して財を築き、財力を持った時に櫛田宮の分社を行い、博多港に足がかりをつくったんです。

このことで太宰府の役人が勝手なことをやってはいけいとお咎めをします。しかし、当時、忠盛は京都の天皇の近くにいて荘園管理を行っていました。太宰府からお咎めを受けますが、文献によりますと 1133 年太宰府に下文を送って、天皇直轄でやっている、天皇の命を受けて行っているからお前たちが口出しすることではない。このような内容の下文を出して太宰府の指摘を一蹴しています。

こうして平家が栄えていく。そして瀬戸内海の手を平定して、一気に海の権力を握ると、貿易も自分たちの思うようにできるようになって、莫大な富を蓄え一族が繁栄する礎を築くことになります。その莫大な富を受け継いでいったのが清盛です。「平氏にあらずんば人にあらず」、平家一門でないと人ではないというほど権勢をほしいままにします。

お伝えしたいのは、とにかく神埼の荘というのは非常に面白いといえますか、平家の財力を蓄える場所としてその当時重要な役割を果たしていたということです。

次に、脊振山や栄西、霊仙寺（りょうせんじ）のお話をさせていただきます。

脊振山は奈良時代、元明天皇（げんめいてんのう）の命で 709 年に開山したといわれています。

当時、その前後に疫病が流行ったといわれ、元明天皇が祈祷するために、那珂川町のお坊さんに命じて誉朗寺（よろうじ、後の霊仙寺）を現在の霊仙寺跡のあたりに建てさせ開山したのが脊振山の山岳宗教の始まりといわれています。

それから山岳宗教の地として山一帯が発展していくわけですが、その中心となったのが霊仙寺で、脊振山の山岳宗教の上宮・中宮・下宮のうち中宮的な働きをしました。

脊振山と英彦山はよく比較されますけれども、地元では脊振千坊、岳万坊、英彦山三千八百坊という言葉がございます。坊というのは一つの宿坊（主に仏教寺院などで修行中の僧侶が寝泊りをする建物）のことですが、脊振千坊というのは霊仙寺辺りを指していて、霊仙寺一帯に千ぐらい坊があったといわれています。岳万坊の岳は御岳（オントケ）さんのことで脊振山を中心に、太宰府の近くから唐津の辺りまで含めると万ぐらい坊があったということから名付けられました。実は、現在の脊振山頂という呼び名は明治になってからなんです。それまでは御岳（オントケ）さんとか弁財天とか、そういった名で呼ばれていました。そして英彦山は三千八百坊あったといわれています。脊振の 4 倍ほどの坊があったんですね。

また、脊振山といえば栄西、お茶の発祥の地として知られていますが、当時は宋の時代、遣唐使が 894 年に菅原道真によって廃止され国交が無くなります。しかし、そのような時でもお坊さんや商人は宋へ行き来ができました。栄西は宋に渡る前に、北部九州に 4～5 年以上滞在して宋に行くタイミングを図っていたそうです。そして、帰ってきてからも一気に京都に上らない。なぜか。それは、当時、天台宗が占めている中に臨済禅宗を持ちこんだからです。他の仏教を持ちこんだということで弾圧がかかり北部九州に 4～5 年滞在していたんです。その間に聖福寺（しょうふくじ）などいろいろなお寺を九州に建てる中で、お茶の栽培もこの地で行ったのだろうといわれています。

このような中、時代が流れ、鎌倉時代になりますと元寇、蒙古襲来により北部九州は慌てふためきます。そういった中、天皇の命によって東妙寺（とうみょうじ、吉野ヶ里町）が祈祷寺として建てられます。元寇、蒙古襲来は何とか防ぎましたが、鎌倉時代は武士社会なので元寇の恩賞として土地を与えなければならない。しかし、元寇は外国からの侵略なので土地を得たわけではない。恩賞をどうしようかと悩んだ末に、天皇勅旨の田である神埼の荘に目をつけ、神埼の荘を拡大し、10 町・5 町・3 町という単位で約 400 人に配分したといわれています。

ここで活躍したのがさきほど紹介した西大寺派、現在の真言律宗のお寺・東妙寺です。この東妙寺に命じて土地を拡大させたわけですが、この西大寺派は非常に土木技術、河川整備、湾岸整備、商売というものに長けた人たちの集まりであったといわれています。彼等により田手川の河川整備などが行われ、神埼の荘は後に三千町になっていくという拡がりをみせます。

東妙寺には他にも興味深い言い伝えがあります。その後、鎌倉幕府が滅亡する中で、足利尊氏が天皇と争って一時九州に逃れた時に、この東妙寺で祈願をして再起をかけて再び上京し、2 年後に室町幕府を開き、征夷大將軍になる。そういった歴史を含んでいる場所でもあるのです。

スライド（図 9）に、神社やお寺の位置関係を示しました。城原川と田手川の間、吉野ヶ里遺跡周辺、脊振山に点在しているのがわかります。左側に三所大明神（さんしょだいみょうじん）と呼ばれている白角折神社（おしとりじんじゃ）・櫛田宮（くしだぐう）・高志神社（こうしじんじゃ）の写真を、そして右側に修学院（しゅがくいん）と東妙寺の写真を載せています。

スライド（図 9）の右上のほうに修学院というのがありますけれども、修学院は脊振山の山岳宗教の上宮・中宮・下宮の下宮にあたる場所です。昔は積翠教寺（せきすいきょうじ）と呼ばれていました。現在、この山一帯のお寺としてはこの修学院だけが残っています。霊仙寺跡の管理もこの修学院がされています。

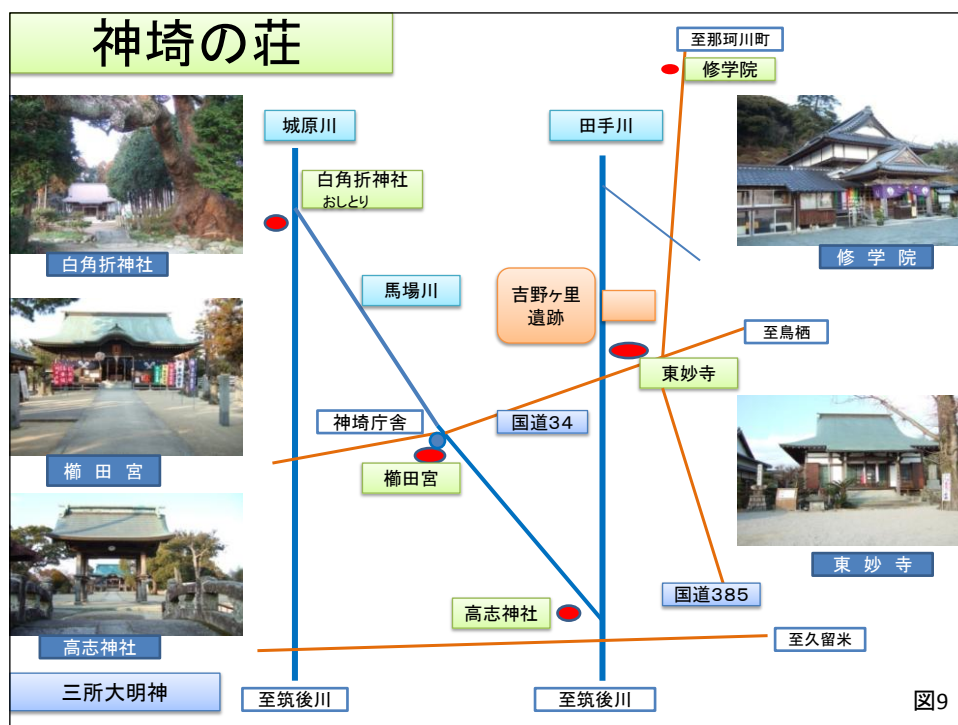


図9

スライド（図 10）をご覧ください。中ほどに乙護法堂（おとごほうどう）などの中宮があって、そして下のほうに積翠教寺、現在の修学院があります。そして右側に紫色で筑前・肥前街道を示していますが、これが平家の財を支えた道路でした。その後、平安から鎌倉、室町の時には本当の街道としての利用がされました。神埼から博多まで直線でいけるコースだったんです。



図10

これ（写 23）が霊仙寺跡のすぐ真下のところに現在も残っている茶畑です。地元の管理のもとここだけが残されています。私もこれを非常に大切にしている、昨年だけでも全国から 300 人ほどを案内しました。これ（写 24）は脊振山にある栄西象です。



(写 23)



(写 24)

脊振山 中宮 靈仙寺



写25

「日本最初之茶樹栽培地」記念碑と「乙護法堂」

鍋島勝茂により、慶長年間(1596～1616)に戦火で焼失した10坊を20年かけて再建 明治の廃仏毀釈まで続く、現在は乙護法堂のみが残る



写26

水上坊跡の霊水石
梵字「バン」大日如来を意味する

喫茶養生記 (1212)

茶は養生の仙薬なり延命の妙術なり、
山野之を生ずればその地神霊なり。
人倫之を採ればその人長命なり。
天竺、唐土、同じく之を貴重

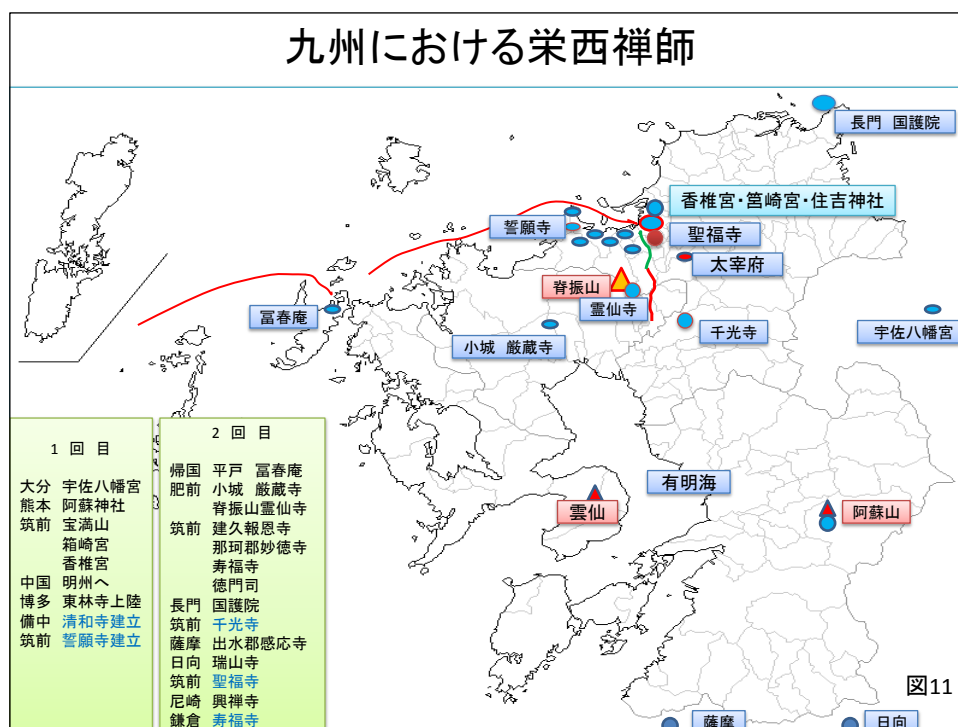
これ（写 25）が乙護法堂という江戸時代に 10 カ坊ほど建てられた坊の一つです。ここに日本茶栽培発祥の地という碑がたっております。

この奥のほうに水が湧いていますけれども、ここ（写 26）に「バン」という大日如来をあらわす梵字が刻まれた石があります。大日如来は仏様の中心的なものです。そういったことから考えると、「バン」という梵字が刻まれた石が、この水の湧くところにあること自体、ここがこの山一帯の中心的な場所だったのではと推測されます。ここは水上坊と呼ばれています。昭和の始めまでは、7月に地元の若者がここの水を汲みに行き、田の水口にまくという行事がありました。

これ（図 11）は中国に渡る前後の栄西の九州での活動状況を図にしたものです。中国へは二回渡っており、一回目は 27 歳の時。二回目は、平安末期から鎌倉のはじめに中国・南宋に行っています。中国から帰国後どこで活動したかという、二回とも、北部九州、ほとんどが博多を中心に活動しています。

阿蘇山や、薩摩、日向にも行った経緯はありますが、主にここを中心に活動して中央に上る機会をうかがうようなことをやっております。さきほども説明いたしましたが、当時は天台宗が

占めている中に臨済禅宗を持ちこんだので、北部九州に滞在して機会をうかがっていたんですね。



また、私どもは、博多の聖福寺との交流も行っております。栄西が植えたと言われる聖福寺の茶畑は、秀吉の時代に分割されて現在の唐人町などになっており、現在、茶畑はありませんとのことでした。昨年、国の許可を得て雲仙寺の境内からお茶の木を掘り出して聖福寺に植えました。このような活動も行っております。

桑子敏雄氏

お話を伺っていて日宋貿易をはじめとして東シナ海、玄海灘、有明海、全体を視野におきながら考えないとこの佐賀の空間というのはなかなか見えてこないのかなあという印象を持ちました。

特に土木技術の面に関して、私は知らなかったんですけれども、東妙寺の土木技術とか、それから成富兵庫の話もありますし、仁比山は護国寺ですか？あそこは聖武天皇の勅命で行基（ぎょうき）が開いたという伝承がございます。行基菩薩も当時の大土木技術屋でしたから。そういう意味でいうと日本の先端的な土木技術の展開するそういうフィールドであったというようなイメージが強く感じられました。ありがとうございました。それでは荒牧軍治先生お願いいたします。

荒牧軍治氏(佐賀大学教授)

私も基調講演をされた矢田先生と一緒にさきほどの委員会、九州形成計画をつくっている委員会に参加しているんですけども、私も基調講演で矢田先生がおっしゃったように委員会でつくっている内容は非常に良くできていると思います。

非常にバランスよくいろんなものが考えられたいい計画になっていると思うんですが、その最後の委員会の時にある委員の方が、「これは非常に良くできているけれども、歴史的・文化的な視点に欠けていないか」というような発言がありました。その時非常に私は感動して、なるほどそういうことが今からこの九州という地域を語っていく時に必要なんだなあということを実感いたしました。

なぜそう思ったかという私はさきほど紹介していただいたように、今、有明海にどっぷりとはまっています。佐賀大学では有明海の総合研究プロジェクトという文部科学省から補助していただいているプロジェクトチームのリーダーをやっていますし、それから川上さん(NPO 法人クリエイト九州理事長)たちや佐賀県の人たちと一緒に有明海再生機構というのをやって、有明海がどうありたいのか、あるべきなのかということを行政の人たち、研究者の人たちとやっているわけです。

それと同時に、この有明海問題が起こった時に川上さんと話したことは、どうも有明海は市民に好かれてない、そんなに重要だと思われていないのではないかとということでした。

例えば琵琶湖の話をさきほど矢田先生が出されていましたが、琵琶湖が真水で非常に重要だと思われているほどには、有明海はそんなに理解されていないし、好かれていないのではないかとこのように感じました。

そこで私たちはもう一つ市民レベルのそういう組織をつくろう、つくりたいと考え NPO 法人有明海ぐるりんネットをつくりました。組織の中で何を話しているかというと、さきほど話題になった歴史の問題、文化の問題、食、祭り、有明海がもっている豊かさというか、本来もっている豊かさを我々自身が実感しよう。楽しもうよ。その中でさきほど合田先生に説明していただいた風浪宮に出会ったり、お島さんの伝説に出会ったりしました。

それと同時にガタリンピックをやっている鹿島の人たちに出会う。それから風浪宮の近く、大川でいろんな取り組みをなさっている大川の仲間たちに出会う。

そうやって有明海をめぐる様々な問題を好きになっていくという市民活動をやってきたわけです。そういう形で私たちは、委員会の中で語られた、歴史や文化や、それから食といった現実の暮らし、そういう実感するようなものをきちっと我々自身が感じて発信しようということを今やっているわけです。

そういう点でいうと今回我々が開催した今日のシンポジウムというのは、ここに書かれている「空間に刻まれた歴史・暮らし・文化」を我々自身が、それぞれの場所で発見し、発言し、そしてそれを共有化する。そういうことが必要なんだということを感じています。

有明海のことを本当は山ほどしゃべりたいんだけど、ちょっと時間のこともありますので、一つだけ私が非常に面白かった事、経験をお話します。

これは「有明海・八代海沿岸地域開発及び交通体系に係る検討委員会」という長ったらしい名前ですが、1994 年につくった委員会です。今でいう国土交通省、旧建設省がつくったんですけども、これ 8 の字に見えるでしょうか。この 8 の字に見えるところに道路を通しましようということが基本的なアイデアです。(図 12)

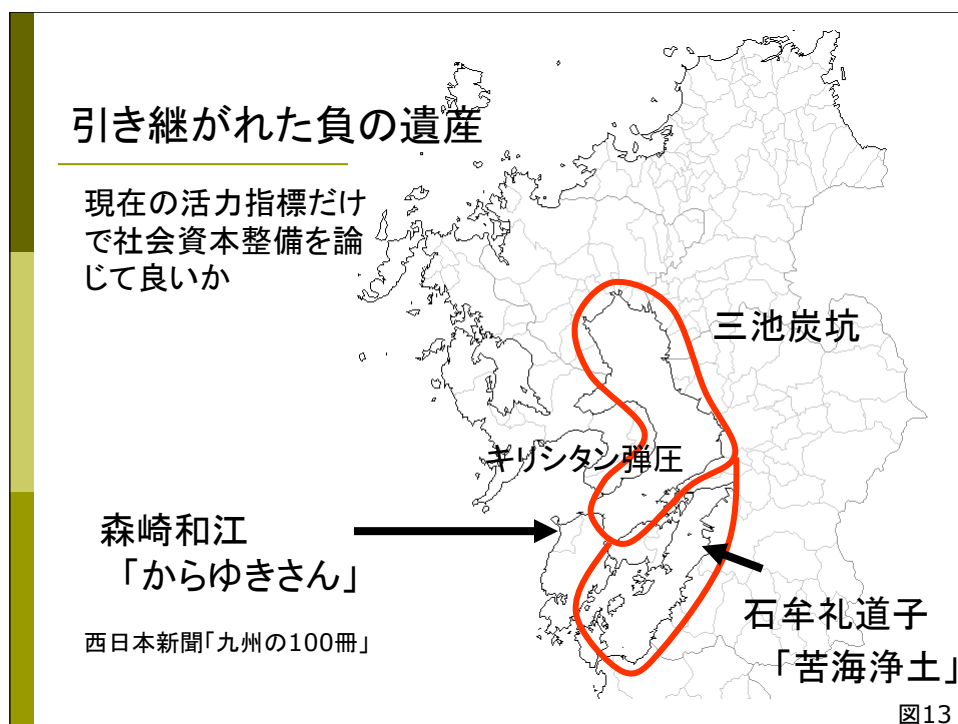
これはもともと佐賀県が発想された有明海湾岸道路というのをヒントにして九州地方建設局(当時)がこういう構想にまとめ上げていった。それをオーソライズしようという委員会でした。

もちろんこういう委員会ですから経済的な指標であるとか、物流がどうなるかとか、文化がどうなるかとか一生懸命勉強したんだけど、それでもなお、どうも今一つなぜこれを、このルートをつくらなければならないのかがしっくりこない。



さきほど矢田先生があな地域に一つの絵を描かれていましたので、そういう絵がその時にあれば、そういうルートをつくることに意味があるということを理解できたんだけど、その当時はまだ、ここは本当につながらなければならないのだろうかということを一生涯懸命悩んでいたんですね。

実はこれは私が発言したというか、自分の中で考えたことをいったことです。（図13）



まず大牟田というところがあります。それは近代になってからですけども、いわゆる石炭で富を生み出して日本国中にそれを配って、そして一瞬で滅んでいった場所。

それから南のほうに石牟礼さんの「苦海浄土」と書いています。これは水俣病を描いたものです

が、戦争に敗れて食糧不足になった日本が化学肥料を作らなければならないというのが宿命的にあった時、その4割以上を生産していたチッソという会社が引き起こしたいわば公害というよりも私は一つの刑事事件だと思っていますけれども、それを書いた石牟礼さんの一つの世界がある。

それからもうちょっと西のほうに行くと今度は天草、島原というところにはキリシタン弾圧があって、そのキリシタン弾圧で痛めつけられた後、明治になってからは「からゆきさん」が登場します。国が開いた時にまず最初に出ていったのが男たち、それから次に女たちが海を渡ります。「からゆきさん」の大部分は売春というのが仕事になってしまったと思うんだけど、それを森崎和江さんが「からゆきさん」という題で書きあげていった。そういうものをずっと並べていくわけですね。有明海沿岸域のこの空間は引き継がれた負の遺産を色濃くもっている。そういう場所でどのような道路を作るべきかの議論をしようとした訳です。

我々土木工学の技術者は、道路を考えるとまず発生交通量を調べ上げて、どこからどこにどれだけ交通が流れていくかというのを調べて道路を設計していくわけですね。本当にこれだけドカッと落ち込ませてしまった歴史を有しているところに経済指標だけで論じていいのかと誰もが考えます。

むしろ積極的にこの地をもう一回持ち上げていこうというような視点が必要なのではないかということを議論したんです。そういう議論をやることで、やっとそういうのが少し自分たちでも納得できて、「そうだ、キリシタン弾圧、石炭、それから公害と続いた一つの貧困の中にいるこの地域を、道路を造ることによりもう一回引き上げていこう」ということを考えました。

社会資本整備の中に経済的指標だけではなく、歴史をきちっと検討したうえで考えることも可能なのではないかということを議論したことを思い出しました。それをヒントにしてちょっと今日はそっちのほうから話させてください。

九州の歴史を考える時に私は、私が読んだいわゆる文芸作品を思い起こします。

司馬遼太郎さんの小説はいくつもあるんですけど、その中で特に「街道をゆく」という何巻もあるのがあって、そこに古い時代から現代に至る風景が刻んである。

それから私が出会った人の中で非常に面白かったのは、白石一郎さんという壱岐出身で、海洋小説「海狼伝」、「海王伝」を書いた人です。彼の小説を読んでいくと実は我々は海の民、九州という地は海の民の末裔であることがはっきりと分かる。そのことが今我々の中に欠落しているということを考えたりしました。

それから隆慶一郎の「死ぬことと見つけたり」は、佐賀に住んでいる人間として、武士というのが一体どういう存在であったのかということを考えなければいけないと思いました。ただこういうふうに考えていってもなおかつ欠けているものがあると私は思いました。

九州の思想家たち（図14）が語っている事象の多くは実は庶民のレベルです。

例えば、谷川雁さんという人は炭鉱に住みついてそこから発言をしていた人で、そしてその仲間であった森崎和江さんがさきほど述べたように「からゆきさん」を書いて、それから石牟礼さんが苦海浄土でいわゆる公害の問題を告発すると同時に、その地域が持っていた、正しいかどうか分かりませんが、「たゆたう」ようなというか、ゆったりとした風景の中で殺戮が行われていくことを書いていくわけですね。そういう庶民の生活を書いたものがあつたわけですね。

そして私が石牟礼さんの「苦海浄土」に刺激されて水俣病を告発する会というのを福岡でもつくって患者さんたちの闘争を手助けしていた時代に渡辺京二さんという人に出会ったんです。渡辺京二さんという人は、「北一輝」とか、「宮崎滔天」だとか、「なぜいま人類史か」とか、近代と格闘している思想家であることは間違いないんだけど、彼の著作と付き合う中で「こんなものを」というような彼が書いたものに出会ってしまった。

九州の思想家たち

谷川 雁 水俣出身。上野英信、森崎和江、石牟礼道子らと雑誌「サークル村」を創刊し、炭鉱労働者の間で活動
長野県黒姫山に移住、C.Wニコルの親友

森崎和江 「からゆきさん」

石牟礼道子 「苦海浄土 わが水俣病」

渡辺京二 「北一輝」「評伝宮崎滔天」「なぜいま人類史か」
「アーリイモダンの夢」
日本の近代化と格闘

「逝きし世の面影」

和辻哲郎文化賞

図14

それはここにもって来ましたけれど、「逝きし世の面影」（渡辺京二、平凡社ライブラリー、図15）という、評論集と言うのかなあ、一つの著作に出会ったわけです。

有限の物質, エネルギー, 環境 持続可能性

パラダイム変換 新たな文明の創設

どの方向に向かうかは私にはまだ見えない

渡辺京二
「逝きし世の面影」

平凡社ライブラリー



現在の表紙

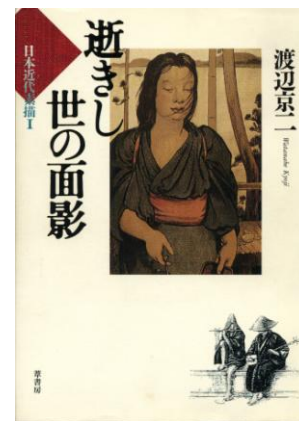


図15

出会い:「水俣病を告発する会」

この本は、「今どこに我々がいるか」ということを考える時に非常に重要なことを示唆してくれます。例えば持続可能性をベースにした新しいパラダイムというか、新しい文明をつくらなければならない時点に私たちが今いることが確実な時に、私自身は今どちらに向いていけばいいかということは理解できていません。

渡辺京二さんは、江戸から明治にかけて日本の中で一つの文明が死んだことを書いているわけですね。かつてこの日本で一つの文明が滅んだということ「逝きし世の面影」ということで書いているわけです。

例えば書き出しは、「私は日本文化を主人公とする長い物語の発端に立っている。物語はまず一

つの文明の滅亡から始まる」(『逝きし世の面影』より引用、以下「」内同様。)というふうに書いています。彼が何を書いたのかというと、江戸末期から明治にかけて日本にやってきた異国の人たち、例えば、私たちが良く知っている人でいうと、長崎で海軍を勝海舟たちに教えたカッテンディーゲとかそういう人たちが出てくるんですけども、その人たちが残した文書を詳細にこれだけの冊子の中に書き込んでいったんです。

その中の一つずつが非常に凄くて、例えば、チェンバレンという人が書いている文章は「あの頃1750年から1850年の社会はなんと風変りな絵のような社会であったことか」。チェンバレンはたくさんその事象を書きあげていきます。

子供たちがにこにこ笑っていること、女の人が非常に美しいこと、そして武士たちが非常にキリッとしていること、そしてそれでいながら非常に親しみやすいこと。そういうことを彼は書きあげていくわけです。

なおチェンバレンはもう一つ書いていて「国民の生活は依然としてそのまま。本質的には少しも変化していない」。渡辺京二さんはそれを文化と呼んで、例えば知的な訓練を従順に受け入れる習性であるとか、国家と君主に対する忠誠心であるとか、付和雷同を常とする集団行動癖であるとか、外国を模範としてまねをするという国民性の根深い傾向であるとかということころは日本人は変わっていないと、チェンバレンはそういう。でも、あの絵のような文明は滅んだというふうに書いたというわけです。

それから例えばハリスの通訳をしていたヒュースケンという人は「この国の質樸な習俗とともにその飾り気のなさを私は賛美する。この国土の豊かさを見、いたる所に満ちている子供たちの楽しい笑声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見出すことができなかった私は、この幸福な情景が今や終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳を持ちこもうとしているように思われてならない」と書き残しています。彼は、確かに西洋の人たちは日本よりも優れた文明を持っている、文明というか非常に強大な文明を持っていると知っていたんだけど、自分たちがこの日本にやってきて、その自分たちの文明を日本人が取り入れようとすることによって、もともと持っていた非常に豊かな文明を滅ぼそうとしているということを非常に恐れています。

ハリスは、例えば米の問題、農業の問題も、非常に優れた農業がここで営まれていたことを知っています。また、イギリスの駐日大使をやったオールコックという人は、「日本の農業は完璧に近い。自分の農地を整然と保つことにかけては世界中で日本の農民にかなうものはない。いたる所で半身または全身裸の子どもの群れがつまらぬことでワイワイ騒いでいるのに出くわす。非常に明るくて、そして農業は非常に完璧に行われている。外国人の目にはそう見えた」と書いているわけですね。

そういうような空間が少なくともこの江戸末期ぐらいから明治初期ぐらいまでは確かにあって、その文明が一つ滅んでいって、今我々はこの空間にいる。

渡辺京二さんは、今の近代文明をつくったことが間違っただとは一言も言っていません。ただ、こういう文明があって滅んでいったということを記述していったわけです。

「逝きし世の面影」は、非常にたくさんの章だてとともに、いろんなことを記したものがありますし、銅版画というんでしょうか、そういうものを使ってその風景がどんなものであったかというのを記したのがこの本の中に書かれています。私たちはややもすると進歩史観というか、我々はだんだん進歩してきたんだという史観の中にいるのかもしれませんが、実は非常に大きな段落をもちながらある文明が生まれ滅び、そして次の文明に移ってきた。そういうことを理解しておくべきだと彼は言っているんだと思います。

我々は実は今この文明の中にいて今から何かをしようとしているけれども、我々がこれまでに作

ってきた文明をもう一回どこかで清算して新しい文明、持続可能な文明の中に移っていかなければならないのかもしれない。

そういうことを予感させるような著作に出会ってしまったので、ちょっとこれを紹介したくて話させて貰いました。役に立ったどうか分かりませんが、私の好きな思想家のことを紹介したくてしゃべらせていただきました。ありがとうございました。

桑子敏雄氏

荒牧先生ありがとうございました。パネリストの皆さんのお話を伺いまして、佐賀県に対する、佐賀平野に対する、或いは有明海に対する思いが、ひしひしと伝わってきたような気がします。

課題は今まで皆さんにお話いただいた過去から蓄積されたものですね。これは必ずしもまだ十分に整理されているとはいえないんじゃないかなと思います。

整理をしていくプロセスをどうつくるかということもとても大事だと思いますが、同時に、今、荒牧先生からお話がありましたように負の遺産もふまえた形で新たな一步をどう踏み出すか。その方向感覚といいますか、趣といいますか、どういう方向に趣を向けるか。顔ですね。趣を向けていったらいいのか。

空間全体を見た社会資本整備というお話がありましたけれども、文化とか歴史とかなぜ必要なのかということ、村岡さんのお話にもありましたように、そういうものを認識することが地域に生きる人たちに大変な喜び、充実感、そこに生きることへの喜びや誇りを生み出してくれるものであり、アイデンティティーにかかわることであるということですね。

みなさんにもう一度お話をして頂く時に、地域に生きる喜びや誇り取り戻したい、もっと大きくふくらませたり、発展させたりするための社会資本、社会の中に備わっていないとかならない資源といいたいでしょうか。合田先生のお話だと社会関係資本となるのでしょうか。お祭りもそうですし、治水の技術もそうですけれども、ここ数十年来の経済偏重や利益中心ではあまり評価されてないといいたいでしょうか。それは評価難しいところですね。

それをどういうふうに地域の発展に結び付けていくか。その辺が一番大事なんだろうなと思います。

もう一度みなさんにお伺いしたいと思います。

そういう方向で考えた時に、そこで思い浮かんでくるキーワードってどんなものなんだろうと思われませんか。

例えば、私、そして合田先生もそうですけれども、「龍宮から見る」というのは一つのキーワードとして提案できたかなと思っています。パネリストのみなさんは、村岡さんが徐福さん、多良さんが栄西、荒牧先生が渡辺京二さんなどがキーワードでした。そういう方たちの発言、行動もふまえた形で、これからどういう方向を向いていったらいいのかということについて、他の方たちのお話も参考に、一言ずつ発言していただければと思います。では、荒牧先生からお願いいたします。

荒牧軍治氏

合田先生が言われたことに感銘を受けました。私たちは、有明海を今、様々な角度から論じています。私たちは科学、サイエンスだけではなくて、社会だとか、人文の人たちとも研究をしています。

そうすると、例えば、もともと有明海がもっていた非常に豊かな漁労生活であるとか、自然と人間の関係が現れてきます。彼らの分析は非常に正確で、漁民・農民といったいわゆる半農・半漁の人たちが有明海と低平地の間を行き来しながら暮らしを立てていたということを分析して示して

くれる。その豊かさをこれからも維持していこうとすると、今までのように農民・漁民だけがそれを豊かさとして享受するとか、それを持続するということはもう不可能だと私は理解しています。

それを継承するためには我々のような NPO 法人であるとか、学校であるとかが頑張って、いろんな人たちを有明海に連れて行って触れさせる。お祭りに参加してもらおう。そういうことを地域の人たちだけではなくて、福岡の人も佐賀の市民たちも、そこで出会うような仕掛けを今からつくっていかねばならないだろうと考えています。

我々のような組織、NPO 法人が 10 個、20 個、30 個と次々に出てきて、自分たちの市民生活、生産生活をやっていると同時に、そういう文化や祭り、有明海に夕食の食材をちょっと取りに行くとか、アゲマキがわいたので取りに行くとか、それぐらいの豊かさを市民の人たちが持ってくるような仕掛けにしないと、もう続かなくなっていく。そういう感じがしているので、地域における組織、職場組織だけではなくて、もう一つの自由な組織をつくっていかないと、もう持続できなくなるのではないかというふうにみえています。それがどうやら皆さんに認識されてきたので、可能性とかチャンスとか非常に大きくなっていると理解しています。

桑子敏雄氏

お金の使い方ですね。行政の計画の中でどういうふうに目に見えないものにお金をきちんとつけるか。今、荒牧先生がおっしゃった、従来ある、人と人の関係を越えるような何か新しい関係を生み出すことに本当にお金をつけられるか。だいたい前例踏襲主義ですから、そんな例はないぞと、会計検査で文句を言われるのが怖くてつけられないということがありますよね。行政の仕組みの中に新しい関係を生み出すような思考とか、制度とか、そういうものを生み出すことが大事なかと荒牧先生のお話を聞いて思いました。ありがとうございました。続いて多良さんお願いいたします。

多良正裕氏

特別なことではありませんが、実際、私がやっていることを紹介することでヒントになるかもしれないというものがあります。

それはお茶ですけれども、脊振山はお茶の発祥の地ということを継続的に 20 年近く発信し続けてきました。その中でやっとここ数年全国から注目を浴びるようになってきました。

煎茶（せんちゃ）道の祖、高遊外壳茶翁（こうゆうがいはいさおう）を紹介されているみなさんと手を結ぶ。高遊外壳茶翁だけ、栄西のお茶だけでやるのではない。佐賀県の宝としてお互い手を結んでやりましょうというような活動をしています。

それから昨年 3 月から脊振山茶談議というのを毎月一回仲間で始めました。この活動の中で多くの方が関心を持っていただいて、北九州や久留米から参加していただくとか、そういったつながりが出てきています。

苦労することは、資料などを集めることです。地元には、佐賀県全体の歴史・文化について研究をされている方が結構いらっしゃって資料も豊富にお持ちです。しかし、素人が探すとなるとどこにいいのかわからないし、博物館や図書館に行ってもなかなかそれにいきあたらない。資料への仲介をしてくれるようなところがあればいいなと思っています。行政ももっとわかりやすい観光案内やチラシ、資料などを用意するといいのでは。

例えば、佐賀の歴史や文化に関心を持った方が、福岡のほうからもみえられます。しかし、せっかく吉野ヶ里にきているのに、吉野ヶ里遺跡だけで終わってしまっている。それを平安から鎌倉につないでいくとここに滞在している意味といいますか、歴史がここの中で動いたんだというのが感じられる。吉野ヶ里遺跡だけではなく、平安から鎌倉の時代に展開されたストーリーも紹介する。

行政、専門家、民間レベルの活動団体がお互い協力すればもっともこの地の魅力が広がりをみせるのかなと思っています。現在も那珂川町の郷土史家のみなさんと連絡をとっていろんなことを教えていただきながら福岡と佐賀のつながりというのを勉強させていただいています。

桑子敏雄氏

今までの研究の蓄積とか、そういうものがあるけれども、それをどううまくつなげていくか、或いは共有していくか。私が思うには、そういう文化的な研究とか、活動されている方は確かにいらっしゃるんですけど、今日のテーマのような形で、これからの地域の発展のための社会基盤・資本としてどういかしていくか。そのつながりがなかなか見えないと思います。行政の人も、仕組みの中でそういうことがきちんと整理されていないんじゃないかなというのが私の印象です。そういう意味でつなぎ役としての、単に情報を集めて発信するだけではなくて、行政プロセスにつなげられるような資産の管理機構ですか、そういう組織とか、箱モノではなくて、それが必要なのかなと思いました。ありがとうございました。では、合田先生お願いいたします。

合田博子氏

たまたまですけども、福岡県のほうに私財を投じて水の図書館というのを最近つくられた方がいるのを知っていますが、そういうコーディネーターのような、それは行政でもいいですけども、つなげていくというそういうお仕事が今後大事になっていくと思います。

NPO 法人でそういうものをつくるのもいいし、どちらかにまかせるというのではなくて、要するに多様な小さな集団が、それぞれ地元で、ある程度小さいフェイス to フェイスで顔が見える関係が近いところでできているのを、また誰かがつなぎ役になって、いっぺんにたくさんというのではなくて、一つ一つ手をつないで自然につながっていくということが大事ではないかと思います。

さっき途中で話がきれてしまいましたが、お水を取ってくるというのは、ただ単に宗教的にお水を取ってきて清めるというだけではなくて、たまたま肥後・熊本のほうで川童（かわわろ）と山童（やまわろ）という言い方があって、川童というのは川の童、山童というのは山の童のことですが、川童というのが河童のことで、山童というのは猿のことなんですね。一方で少童（わたつみ）というのはちいさな童子、少童とも書きますが、海の童子・海童とも書く。

山の山童、川の川童、海の海童というのが形を変えるけれども、全部流域で同じものだというふうな伝説的な表現の仕方をしているわけです。そういう形で、山に住む人、川の流域に住む人、海に住む人というのを、たまたま水の流れという一つのものでつなげているという、やっぱり昔の人はえらいなと思っています。理解、読み解くと言ってしまうと、神話的表現かなと思ったりするので、やっぱり一番大事にするのは地元の小さな集団で、普通ローカルって言っていますね。それらをつなげていけばまさにグローバルにもつながるということ。ただ、いきなりバーンとグローバルがあるのではない。ローカルだけでまとまっているのではない。そういう気持ちをもっていこうと思います。具体策はまさにローカルな条件にしたがって、これから考えるということになりますが、此处が肝要です。

桑子敏雄氏

合田先生ありがとうございました。では、村岡会長お願いいたします。

村岡央麻氏

文化や歴史をまとめて研究し合う場所が欲しいというお話が出ましたが、幸い佐賀には「徐福長

寿館」という佐賀市の施設がございます。そこには、佐賀だけでなく、日本はもとより、中国、韓国の徐福の研究資料を数多く集めています。この施設のおかげで、佐賀で徐福国際シンポジウムを開くことができたのです。

合田先生のお話の中で、沖ノ島参りの時に浮立が舞われたということが出ました。「浮立」という言葉が他所でも使われているかどうか知りませんが、佐賀には、このような古い伝説や古い神社、そして習慣などがたくさんあって、それぞれの地元の神社に浮立としてお祭りの行事の中に残っております。先日よりその浮立を活かして佐賀を活性化できないだろうか、佐賀は他所からお金を落として下さることが少ない中、年に一度は全国から見に来られるような大会ができるぐらいの浮立があるのではないだろうかと調べていました。

すると、市内に 32 ぐらいの浮立がそれぞれの神社に複数あるということがわかってきました。今やらなければ、それは継承できなくなるのではないだろうか、どこも細々と残っているので、それをまとめる役目を何かしていただけないだろうか、商工会議所の方が動き出して下さっています。佐賀の浮立は、面浮立のように勇壮な浮立もありますが、平安朝の時代を思わせるような優美な浮立もたくさんあります。

そういうものをどこかで一緒に一日中見ることができて、浮立が街の中に賑やかにくり出し、2 日間ぐらい鳴り物が響くような街にしていきたいと思っておりますが、このシンポジウムが、そういうもののきっかけづくりや後押し、また、佐賀の伝統的な文化などをもう一度見直すという契機につながると本当に嬉しいことだと思います。今日は本当にありがとうございました。

桑子敏雄氏

ぜひ第一回佐賀浮立大会に呼んでいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは最後に矢田俊文先生まとめをお願いいたします。

矢田俊文氏

最も厳しいまとめを要求されて頭が混乱しています。私も桑子先生の「日本文化の空間学」という本を年末に読みました。有明海、佐賀平野を中心に書いてありましたのでさっそく正月、三瀬峠を越えて古湯温泉に行って徐福が発見したという砂場の温泉に入りました。徐福はもう 2200 年も前の話ですね。その古湯温泉のあと、成富兵庫の石井樋を見てまいりました。これも大変面白かった。これは 500 年前ですかね。ただ、それと私のやっている国土づくりとがいっこうに結び付かないんですね。それはそれで荒牧先生みたいに私は小説の話も大好きで、白石一郎さんの海を題材にした小説もずっと関心をもっている。そういう話はそれで面白いんですが、私の基調講演で言ったことがどうやって結びつくのかいっこうにわからない。

簡単に、私なりにいいますと農業社会と工業社会と最近崩れた金融社会のあり方でだいぶ違う。おそらく合田先生のやっているのは、地べた産業。つまり農業社会の痕跡です。

私は地理学で、地理学とは先生のいう空間学とまったく同じで、その空間学がまた復活したかなと。自然と人間の関係を地域の中でしっかりとらえていくというのは、古典的な地理学であります。

このポイントは明らかに生活とともに生産ですから、農林漁業における自然との対峙。それが土木技術、農業土木であり、あらゆるところで土地にそれぞれ刻まれている。それが今文化という形で非常にソフトな表現になっています。

その後、18、19 世紀から工業社会になりますから、工業中心で動きまして、水が欲しい、土地が欲しい、住宅が欲しいという形で、農業社会がつくってきたいろんな遺産を壊し始めてくる。最近、2000 年前後からお金だけが動きだして、これが崩壊いたしましたので、おそらくそんなに

経済的に今の文化をとらえると変わらないと思うんです。ただ、今の時代どうしても農業、鉱山という地べた産業といってですね、自然と立ち向かいながら生きてきた 2000 年の歴史というのがいろんな形で残っていてそれを見直そうという脈絡できますと非常に勉強になるんですけども。

ただ、最後に、今ひょっとしたらとんでもない時代に入っている。今まで情報化時代で非常に新しい時代に入ったといっていましたけれども、日本は人口減少社会でそんなに金を稼いでどうするという話と、それから、ひょっとしたら頑張り過ぎると地球が崩壊するかなと。2050 年非常に炭酸ガスが少なくなってくる、温暖化が極致に達する。そこへもってきて金、金、金できた金融資本主義が崩壊しましたから、国土づくりも言葉ではなくて本当に価値転換が必要だと思う。

しかし、何のかんのいって若者がどんどん地域から消えていきます。したがって地べた産業の生産も維持できなくなります。したがって地域が崩壊していきます。森林も水もガタガタです。これを止める動きがいっこうに強まらない。かなりの人が高齢者ですから仕事からちょっと離れて文化に非常に興味を持っています。この力でこれを止めることができるんだろうか。これはまた別です。若者が本当に戻ってくるというのは何なのか。それは職場であり、学ぶ場であり、生きる場であって、この流れは止められない。どう止めるかというのはもう一つ違った村づくり、地域づくり、国土づくりがあるんだろうなと思います。文化的遺産プラスもう一押しがないと若者は戻ってこない。何のために国土づくりをやるかという社会資本整備をするためではありません、地域を活性化させるため。特に地方の崩壊をどう防いで生き生きとしたこの 37 万キロ㎡を、人が住んで自然をコントロールしながら生きる街ができるか。これは回答不可能に近い状態にあると思うんです。いろんな現場、現場でそれぞれ議論しながら盛り上げていただいて、それがどういう形で国の政策やみんなの地域づくりになるか。これは、桑子哲学と私の哲学が最後どうもくっつかないというところがあるので、これがくっついたら大成功だと。私はくっつきたくてしょうがないんですけれども。

元々、地理学と哲学と医学と法学はローマ時代の 4 大学問ですから。ただ、それぞれが医学と法学以外は分解しちゃって、何やっているかわからなくなってきたところがあるんです。その辺のところは非常にニアミスに近いのかなと。ニアミスの、いわゆる死の谷が越えられないという感じがするので、今後気持ちとしては越えたいと思っていますので、みなさんの学問と国土計画とをくっつけていきたいと思っています。非常に苦しい答弁となりましたけれども、どうもありがとうございました。

桑子敏雄氏

これで時間となりましたが、会場から感想をお伺いしたいと思います。

会場からの感想 A

「矢田先生が言われたように、若者をどう首都圏から引っ張り戻すかというのが私は一番大事だと思っています。そのためには価値観が変わらなきゃダメ。やはり国を支えるのは一次産業で、農業、林業、水産業、これが国を支える産業なんだ。それをやることが本当は一番カッコいいというような、そんな価値観を何とかつくりだせないものかと思っています。

今日のテーマは歴史・文化をどう地域の発展につなげるか。この歴史・文化というのは日本人のアイデンティティーにかかわるもので、その対極にあるものとして、例えば東京に生まれて、東京に育って、東京の大学に行って、それで日本のリーダーになったら本当に日本は大丈夫なのかと。

今、政治家も二世議員が多くて、地盤は地方ですけども、ほとんど東京しか知らないような、そういう人たちがリーダーになっていっている。それで本当に日本人のアイデンティティーを保てるのか。また、東京しか知らないそういうリーダーで日本は大丈夫なのかというようなところを逆

に明確にしてくれると、いかに地域を起こすことが将来の日本を支えることになるのかということが明確になるような気がするんですけども、そういう議論もいつかしていただきたいなというふうに考えています。」

桑子敏雄氏

霞が関の参勤交代制度でもつくりましょうか。ありがとうございます。

会場からの感想 B

「地元には若者の働く場が十分ありません。今、山が荒れております。戦後は農業が若者を吸収しました。今、農業は機械化されていますので、山を守る仕事に若者が就職できるようにしてほしい。それと、国土交通省が歴史まちづくり法をつくりました。長崎、佐賀、福岡の長崎街道を文化の道として、歴史の道として、これでまちづくりをしますと世界的な観光地にもなりますし、九州アイランドがそうなると思います。ぜひ、みなさん力を合わせましょう。残念なことは神埼にある古き良き米蔵が壊れたことです。」

桑子敏雄氏

ありがとうございました。ここでお時間となりました。皆様、ご静聴ありがとうございました。

川上義幸理事長(シンポジウム閉会の挨拶)

会場の皆様、長時間に渡りどうもありがとうございました。そして基調講演の矢田先生、パネルディスカッションの桑子先生、村岡会長、合田先生、多良塾長、荒牧先生ありがとうございました。

冒頭の挨拶で、「戦後、どういう時代が暮らしやすかったですか」という日経新聞のアンケート結果をご紹介しましたが、やっぱり人の心が豊かになることが大切なのではないかと思います。そういったことが、地方を具体的に考えていくうえで必要ですし、今日のシンポジウムは非常にヒントになることがたくさんあったと思います。

NPO 法人クリエイト九州はこれからいろいろと活動をやっていきませんが、今日の示唆に富んだご意見を参考にしながら頑張ってまいりたいと思います。またこういう機会をつくりたいと思いますので、引き続きご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

今日は本当にありがとうございました。

シンポジウム

私たちの住んでいる地域（空間）をデザインする
～空間に刻まれた歴史・暮らし・文化を語る～

平成 21 年 3 月発行

編集・発行

NPO 法人クリエイト九州

佐賀市神野東 1-1-1 404

0952-20-0180

※本書の一部または全部の無断複写・複製・転記載等を禁じます。